
続・ただいま 検品中

黒田容子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・ただいま 検品中

【Nコード】

N6283S

【作者名】

黒田容子

【あらすじ】

俺様系エリート×ガテン系女子 の付き合いたてラブストーリー

キャラ紹介（前書き）

「ただいま 検品中」俺様系エリート×ガテン系女子のラブストーリー
リー こっちは、付き合いたて編
前編知らなくても読める読みきり単体の連作となっています。お好きなおところからどうぞ

キャラ紹介

おおざっぱな キャラ紹介

蕃昌 真知子(30)

75名体勢の物流センターを指揮するガテン系。一応、チーフという役職は持っているが… 本人曰くお飾り。

恋愛、若干興味なしな毎日を送っていた筈が、本社からブン投げられた仕事をきっかけに、現在の彼氏？ 柏木竜一と知り合う

柏木 竜一(34)

本社秘書課勤務のチーフ 見た目、俺様系。

重役連中の我侬とコネ入社のお嬢秘書たちに振り回されてきた末に、俺様へと進化した背景を持つが、

天真爛漫なマイペースの彼女には、ザックリ「ただのツンデレむっつり小僧」と言い切られ、なんとか切り替えしてやろうという好戦的ライフ… 満喫中？

大人の恋愛、っていつてもねえ

すれ違う人が、大体振り返るような美形の男から、「仕事柄、美人は見慣れてる」と聞かされてみ？

そんな男から「俺と付き合え」って言われた日にゃ〜
素直に「はい、そうですか」と考えられるものだろうか。

大体：一般的な生活送ってたら、まず ヒヨると思うのよね。
フツーは。

カイシャの帰り道。

ふらっとお気に入りの散歩道へ寄り道してみた

通り道の遊歩道なの。片道45分のツーカーニスト（チャリ通のことね）してるアタシ。

ブレーキワイヤーの調節を昨日やったのも確認したくて、ちょっと遠回り。

季節の花が、常に植えられているこの小路が大好きでね、新春は、椿に梅、そして木蓮 桜、桃、初夏になれば、ハナミズキ。花じゃないけど 柳の新緑が芽吹き始めると、桜の葉がいい木陰へと育ち始める。

今日は、お気に入りの喫茶店で、タンブラーへコーヒーを入れてもらい、ベンチで一息。

街灯に照らされた枝ぶりを眺めていた。ハナミズキの枝ぶりが一番好きなの。スラリとした細い枝が、適度に上へ横へと伸びていく様が エレガントでいいなと思う。

いま吐いてるため息の先は、先日 飛び込んできた恋愛相手
物流センターで75名の規模でやってる業務を指揮しているアタシ
めっちゃガテンなアタシが ひよんな事から、本社の重役秘書と知
り合った。

知り合うだけで済めばこつちも気が楽だったんだけど、やり取りし
てるうちに 勝手に惚れられた。

仕事上の付き合い最後の夜に、いきなり「お前、可愛いな」と押し
倒された。まさに、押しかけてきた俺様。

あのねえ？

そんな一晩のアレ一回で 男と女の間柄へ気持ち切り替わらない
わよ

言ったら フツ と鼻で笑われた上に「ロマンチックな乙女様なん
だな」とよよしされた

びっくりする様な美形で、月並みな言い方で申し訳ないんだが、所
作の一つ一つが『歩くフェロモン』

自覚あるんかな？ 自覚あるから、こんな台詞も平然と使うんだろ
うね。

まったくどう思う？この見るからに百戦錬磨っぷり！

おまけに「仕事柄、美人は見慣れてる」とか、（後日別口で）言わ
れてみ？

サラっと「そうなの？」って笑って受け流せるほど、大人じゃない
わよ

相手を牽制したり、奇襲してみたり。

喜怒哀楽の駆け引きを、ポーカーフェイスで楽しめるほど、私は手
慣れてない。

むしろ、ガテンな職場にいるから、「まずは言葉で伝える。詳細は、

背中では伝える」を地で行く男に囲まれてきた。

「30になつて、一晩一緒に寝たぐらいで騒ぐなよ」「つつつ無言の対応には、追いつけまへーん

静かな住宅街に、会社ケータイが鳴り響いた。

先は、本社らしき電話番号。下4桁が良く分からないから、どこかの部署の直通かな？

「はい、蕃昌です」

「…お前、個人ケータイは出ないのに、会社ケータイは一発であるんだな」

名前を聞かなくても誰だか分わる話し方…奴だった。

「いま、何をしてる？」

なにつて…

「帰り道。行き着けの喫茶店でテイクアウトして飲んでる」

ふつと語気が緩んだ。

「個人ケータイ掛けてもでない、職場掛けても、帰ったっていう…」

「緊急？」

「バア力。せつかく、同じ社内なんだ。今、何してるんだろつつてのが、知りたかつたんだよ」

それって、と言いつけて口をつぐんだ。

ただ単に構って欲しい、ツンデレ小僧じゃん。気付いたら、途端に可笑しくなつて 声に出して笑いたくなくなった。

でも、だめだめ、我慢我慢。

この手のパートが自分の下にいるから分かるんだけど、そう言つとききは

「そう？ 心配してくれて ありがとうね」

嘘でも軽く言つと…「あぁ」と面食らつもの、一瞬。

間違つても、相手の凶星を指摘しちゃうだめ。

「いま、そちらはどうなの？ 忙しいの？」って、おっとり畳み掛けると 一旦は退避できる上に、返事次第では、向こうの状況を探ることが出来るから、仕事ではよく使う手。

「お前、意外に手ごわいな」

ククツと笑う声が聞こえる。

「流石、現場でチーフやってるだけあるな」

「そおう？ 仕事柄よ」手の内を明かした方が、付き合いやすい

「お前、早く俺に惚れるよ。随分、お姫様の恥ずかしがってたけど、俺の見立ては狂いがないんだから。」

「あらあら、困ったわね」

手元のコーヒーを揺らしながら、空を見た。

仕事で常時75人の配下を使って仕事をしている。

どんな肩書きを持とうと、経験があっても、物流センターに立てば

私の配下として仕事してもらっている。

私だって、目上目線で話をするつもりはない。一個人として「どこまで一緒に仕事をしてくれるか」話をするスタンスで付き合い合ってきた。

各パートたちが抱えてる各々のバックグラウンドを適度に尊重しつつ、気質と性格で付き合うようにしていたから…

「私、ガテンの国のお姫様なんだけど。ご指南いただけるかしら？」

きつと、今の悩みは 解決する。

恋愛なんて、どんなにレベルアップしても、基本は変わらない。

所詮、元を正せば人付き合い。

物流倉庫業の人付き合いがメインだったけど、恋愛の人付き合いという別形態が、これから加わっただけ。

ふふ、何とかなるわ、きつと。

「面倒くさそうだな」「あら、イケズな事を言うのね?」「分つたよ、今度の休みはいつなんだ?」「
楽しそうな未来が見えて 笑ったら、隣のハナミズキの枝が揺れて。応援してくれてる気がした。」

だいじょうぶ。

大人の恋愛っていつでも、所詮 人間関係の一形態よ
恐れるな、ガテンの国のお姫様。

言わぬなら、言わせてみしょうぞ、「好きです」と

男の人と付き合いたての頃って 何かと不安になるよね

「この人、ホントにアタシの事が好きなのかな」って

付き合ってるのに、

三十路なのに、

男なのに、

彼女相手に 「好きだ」の一言も言えないってのは どういう見なのよ？

ウチの彼氏は、秘書課のチーフ

役職に任せた横暴三昧の重役の御守りと、コネ入社の塊みたいな世間知らずガールズ社員の面倒が 目下のお仕事らしい

聞く限り 随分 面倒な秘書課さんご一行だけど、ウチの相棒も

相当面倒な男よ

毒を以て毒を制す、その狙いは 大当たりね

チーフに引っ張ったのは、確かに ナイスチョイスだわ、とにかく 仕事は出来るけど キャラ的に面倒くさい！！
とにかく無愛想で、目上目線で、怖い顔ばっかりで。

アタマがいいから 何かあれば 言い負かしてくるし、上背がある事に加え 憎たらしい程 顔含めて身体中のパーツが整ってるから いるだけで 気圧される。

だいたいさあ

好きな女の人捕まえて 「好きだ 愛してる」すら言えないんじゃない ただのダメ男じゃないの？って思う

ベッドでも主導権とりようが、背中と言葉で 人を掴めないんじ
や、ただの俺様気取りのツンデレ小僧でしょ

はあ

どーしようもないガキだわ

ちなみに 今現在 ツン七割 デレ一割 常人ヅラ 残り

って感じ？

どーすっかなあ

やっぱり、女子たるもの「好き」は、ハッキリ聞いておきたいわよね。

待ち遠しい、やっときた土日。

今日は、奴の家でのお部屋デート

職場の人に貰った 珍しいお茶を飲みながら ゴハンを食べた

季節の野菜に 奴の好物、エビを混ぜての Pasta
アクセントは、自家製のオリーブ。浸けるだけなら 意外に簡単
なのよ？

お腹いっぱいなのに、色々 しゃべり疲れて。

白ワインを 二人で空けて、いい気分。

ふとひとつ、思い付いたことがあって。試してみようと思いついた

「ねえ、今 どういう気持ち？」

きもちよく 力が抜けた肢体。部屋に入る風が気持ちいいけど
人肌も恋しい

「どうした？」

「いや…」

クスッと笑いたくなる。　　こんなアタシだけど、お姿麗しいイイ男の暖かい腕を独り占めして　　何も考えずに　　身体を預けられる「嬉しいな、って思ってた」

思ってたままを　　言って　　「それが同じだったら、嬉しいと思っただの」顔を見つめた

そこからも奴をずっと見つめて数秒

奴の整った顔が　　ゆるゆると崩れた

「好きだよ」

ニヤリ。言わせたぜ

実はなにかと思いきんでた割には、案外　　簡単に落ちたわね
私から立ち上る甘い空気は一瞬で消え、毛色の違う気配に変わったのは　　言つまでもない

それを受けて、まるで　　失言したかのような消沈した声から降ってきた

「何か：言わされた気がする」

顔を隠して　　ため息をついているけど念願叶った私は上機嫌

「男の子でしょ？　　それくらい　　スッパリ言いなさいよ」

してやったり、出し抜いてやったり、ウヒヒヒヒ

「お前、ホント　　怖い女だな…！！」

おっと、ベッドで仕返しとかは無しょ？

「心配しなくても　　漬け込んだりしないわ」

宥めるように優しく伝える

「ただ、一度くらい自然な会話の流れで聞いてみたかったの。それだけよ」

ごめんね、と抱きついた

お気に入りの羽布団に　　抱きつくみたいに。

まあその後は　お約束のように　イジメられたんだけど。
え？　何想像したの？

いやだなあ、そっちのイジメもあったけど、別な仕返しがあったのよ

せつかく干した布団が　台無しに乱れたベッド
昼寝というには　いささか　信じて頂けない程　寝相が悪す
ぎる状況の中で。

「目が覚めたか？」

甘ったるい顔で　顔を覗きこまれた

「そうだね、でも　もうちょっと　寝たいかも」

とても事務職には見えない　がっちりとした腕を　抱き枕にし
て一眠りしようとする　髪を撫でられはじめて　ウトウト
に拍車がかけられる

うんうん、そのまま続けてくれたまえ
非常に満足だぞよ

…と思つた途端　ヨシヨシ　が消えた

「むー！」と抗議したら　ニマッと言い返された
「好きだ、愛してるって　しっかり言えたらな？」

そのあと。

奴の高笑いが　夕日よりも眩しく響き渡つた

どーすりゃいいのよ、デート服

最近、深刻に悩んでいること。

…デート用の服って、男ウケを考えた方が良いのだろうか…

本当にぶっちゃけると、アタシは化粧品に興味は一切ない。

仕事柄、汗だくになって働くガテン業なので、やるだけ無駄なんじゃないかと思った途端、

ぱったり止めてしまった。

もっといえば、

ヒールというものが どうにも不健康な気がして これまた興味が無い。

スカートも然り。

日常行動の足が 自転車。しかも、ロードバイクという競技用の自転車なので スカートなんぞ履く余地が無い。

片道25キロぐらい ラクラク行けちゃう乗り物に味をシメて御覧なさいよ。

バス代・電車代、掛りまてん。車も要りまてん。ダイエットの必要もございまてん。

もーだめ

今の生活、快適すぎる！抜け出せないわ。

そんな中、急遽 出来てしまった「彼氏」という存在。

どうすりゃいいのよ、デート服

半べそのアタシが 最初に向かったのは本屋だった
ファッションという流行から久しく遠ざかっている。
てゆーか、流行そのものから 遠ざかってますが何か？

片っ端から ファッション誌をめくった。

それこそ、

17歳前後の高校生対象のものから、ちょっとフェミニンな20代
向け、ギャルギャル向け、女っぷり満載の30代向け。
変わり種で言えば、

古着屋に居そうな女の子向け。

リアルの森には絶対居ないだろうと思われる「自称：森ガール」向け

だめだ、興味がわかない。

むしろ、着て似合わなくないと思うが、敢えて着たいとは思わな
い。

どうしても、

スポーティでシンプルなメンズカジュアルか、

アウトドア系でフル装備した山ガールの方がよっぽど着たい。

色気皆無だ…

「手掛かりだけでも掴まねば」必死にコーナーを見渡すが、既に
半分諦めの境地。

だってさー、

そもそも「色気」って何よ？

露出度上げたところで、アタシだったら健康的に見えて終わるわよ？
唇が生つぽくなったところで、「油モノ食べたの？」になるわよ？

あー無理無理

結局。

悩んだ拳句の果て、オフィスカジュアルな服で 相方と会うことにした。

少しでも シャープさと清潔感のある「出来る女風」

お気に入りのネックレス・バングル・イヤリングは、全部シルバーで統一

唯一の妥協で、ヒール付きのサンダル

化粧も涙を飲んで、うつすらやりましたけど、久しぶりすぎて 加減が分からんばい

もういい！

い、いざ 出陣！

えー でもって結果ですが。

彼氏？の開口一番「御苦労だった。：慣れない事を頑張ったんだろ？」

ブククという中途半端な笑いが一番傷つく。

いや、たぶん 何をやられても 傷つくと思うんだけどさー

「どうせ、一張羅ですよ」 普段、こんな服装しませんから「

フ、と鼻で笑う仕草が 本当に似合いですぎててむかつく。

「そんなヒネくれた顔するな。似合っていない訳じゃない」

うつ ビミョーな言い方するわね。言われると痛いんですけど。

はあ。でも実は、本当に疲れた。恋愛ってこんな一喜一憂の積み重ねなんだあ

こんな連続だったら、オラ身がモタナイだよ…楽しむ余裕、ないし！

ふう、とため息をついた。

やっぱ、オシヤレって 楽しめないと楽しくない。

化粧で化けてみたいとも思うけど、ゴツテリやったら「アタシ」じや無くなっちゃいそうで、実は嫌

みんな似たり寄ったりの服ばかり。

ねえ、その時の流行が「いい」と思えない人間はどうするの？

皆、我慢しながら、皆と同じ事に安心しながら 着ているのかなあ

… つくづく分からない

ポンポン、と頭を叩かれ、視線を合わせた

「どうせ、可愛いとかの服は着ないだろうな、と踏んでいたから予想は出来てた。」

最初から読まれていた、と！！

あーそうですかい。恥ずかしさなのか、怒りなのか 体温上昇っ！
顔が赤くなる

「お前のことだから。普段、どうせ ジャージだろ？」

俺とプライベートで会うことになって 引っ込みつかなくて、気張ってきたんだろうくらい分かるよ」

相変わらず腹が立つくらい正確なお見立てですことっ！！

まあ、この男だったら それくらい計算できるんだろうな。そこに挑もうとしたアタシが馬鹿だったかもしれない

嗚呼、こんなアタシを アンタはどう誘導するつもりかい？

しんねりした顔：半分ヤケで半分気だるそうな複雑な表情して、視線をまた合わせた

「まさか、本当にジャージ？」

それは、さすがに違うけど。

「どつちかかっていうと、今、柏木さんが着てるメンズのラフでシンプルな服の方が好きかも」

本当にオシャレに興味がないのだ。

色気もそっけもない、むしろ凝ったデザインやカットなんかよりも素朴な服の方が好きだ。

厚手のふんわりしたセーターとか、余計なステッチとかないパーカーとか。

残念ながら レディースには少ないんだけど。

「今度、普段着てるのを着てこいよ。…化粧して、着飾ってきた姿勢は可愛いが、似合ってるとは言いつらいな」

クッククックと引き続きの苦笑いが、まだ続いている。

「ぎくしゃくしたままのお前も、見てて楽しいけどね。こっちの調子が狂う」

まあ。

笑われてはいるけど、「似合ってるとは言えない」とおっしゃってるけど、

「姿勢は可愛い」と言ってくれた時点で、奴なりに愛情はあるんだろう

そして、

こちらの涙が出るくらい正確な予想を立てたにも関わらず、

「地の姿が見たい」と言ってくれてる辺り、ある程度は察してくれているのだろう。

正直に言ってくれるのは、たぶん誠意だ

あれだけズレのない推測が出来るのに、「ラフでいい」言うのは理解だ。

なんかちよつと。

アタシって 本当に 愛されてるのかも。

そう思ったら、着飾ってもいいかなあ？とちよつと思った。

カワイイ・素敵 と言われたい。内心でもいいから、喜んでもらえたら 私も嬉しい

恋する女って、そこが基本なのかもね。

ま、次回 お許し通りに ラフなカッコをして登場したら

「似合ってるけど、もったいない」と、よく分からないダメだしが出たんですが。

どーすりやいいのよ、デート服

オシヤレは、やっぱり 難しい。。。

「愛してる」「なんて、言ったことないわよ

ベッドでさー」「愛してる」「って言われて、あれほど　うそ臭く聞こえる言葉もないわよね。

っていうアタシは、相当の天邪鬼かしら？

ドラマとか、テレビとか見ると　簡単に出てくるこの単語：愛してる

うーん、どういう心境かしら。

いまいちピンとこないけど、ピンとこないからこそ　ベッドで言われた日にゃー　一晩寝不足になるくらい興奮するであろう、麻薬的な単語よね。

なんていうのかしら？　未知なる神秘の誘惑って感じ？

だからこそ、

マンガとかドラマで　乱発乱用の大安売りで使われるんだろうね。

そもそも、

「愛してる」の「愛」って、どういう意味よ??

とまあ、今の相棒に聞こうとしたところで、ウチのは　追い詰めないと「好きだ」すら言えないシャイボーイ。

一応、オブラートに包んでいうなれば

未だに、「男は背中を」なんてのを貫こうとしている、遺跡的古典の男。

まあ、恥ずかしくて恥ずかしくて言えないんだろうな
言わない分、絶対に約束は言い訳なしで守ってくれるから、信用で
きるんだけどさ。

男がみたら カッコいい男だとしてもよ？

価値観が違う「女」という生き物としては、ご意向に沿ってないわ
けなのさ。

そう、アタクシのご意向に。

お互い 好きなんだろうから、こうやって付き合ってるんだと思う
けどさ。

いい年コイて、気持ち一つ伝えられないなんて、「なにしとんの？」
と思っちゃうアタシは、

男に敵しすぎるのかしら？

というわけで、

アタシも分かんない、ダーリン殿もわかんない。というわけで、あ
たしたちは「愛してる」がないまま お付き合い続行中。

重役連中＋秘書ガールズに振り回されながら働く マイダーリン
部署の休みが自分の休みという、残酷な労働条件。

今も 私が腕枕を外して起き上がったのに それすら気付かぬほど、
安眠熟睡中。

せっかくの土日なのにな、このままじゃ お昼過ぎまで寝てるんじ
ゃないかしら？

そんな彼氏のために、手料理を作ろうと思いついた。

人生、カイシャだけが人生じゃないのよ？

仕事終われば、一個人の娯楽を楽しむよう、3食ちゃんと食べて

身体を守ってチヨ！！

自慢じゃないけど一人暮らしの自炊暦が長いアタシ。
というわけで、

出来るだけ、「後は加熱して食べてね」的に電子レンジさえあれば
食べられるレトルト化にして 作り置きしてあげませう。

驚かせようと思ったので、本人には 一切内緒。

こっそり、抜け出してちゃっちやと買出しして。

寝ている間に作って、冷蔵庫へ収納しちやえ

考えてたら楽しくなってきたわ、気合いいれて、買出しイッチヨい
ってきやす！

ちなみに

1回の買出しで1週間分の夕飯ぐらいはまとめて作れる自信がある
のよ、うっふっふ

今回はね〜

肉と野菜で、煮物一品。炒め物一品。漬け込んで一品。

魚を 酢でシメてマリネ、焼いて今晚、ほぐしを冷凍で茶漬け具材へ
残った野菜クズを 蒸かして付け合せに、ミキサーにしてポタージ
ユスープ

どう、こんな感じ？

勇んで買い物に行ったアタシだったが。

財布を忘れて。一緒に、部屋の鍵まで忘れて。

ベッドでそのまま寝ていた彼氏の個人ケータイをガンガン鳴らして「ごめん！」

財布と鍵と…結局お迎えと…荷物運びを手伝ってもらいましたとさ…！

はいゴメンなさい。

ほんとゴメンなさい。

天然でサザエさんみたいな事して、ホントにゴメンなさい！

しゅ〜ん。マンガだったら、背景にそんな文字が躍っているんだろう。

カッコ悪い…

疲れて寝ていたのが可哀想だったからさ〜 思いついたのに

「なんだよ？」結局たたく起こして。

「は？ 財布と鍵？ バカかお前？」財布持ってきてもらった段階で

「なんでこんなに買ったんだよ」「これ、一人で持って帰るつもりだったのか？」

作戦 丸分かり。

あーっ意味ねーっ！！

どっよっよーん どっよっよーん

「こんなに買ってどうするんだよ？」

俺、接待の外食と急な出張もあるから 生野菜は買っても消化できないこともある。

言わなかったか？ 背の高い位置から降り注いでくる低い声

…そうだった… そんな事も聞いていた。

はあ。追加のシヨック

私、食べるか…

なんか、人のために作ろうと思つて買つてきたのが、思惑外れて自分のものになるなんて。

外しすぎでしょ、いくらなんでも。

そんなわけで、アタシたちは 重たい荷物を抱えたまま ノロノロと彼のマンションの部屋にたどり着いた。

「はあ重たい。腰にきた」苦笑いするその顔が 胸にささる。

「ちよつと来い。これ、どうやって処理するか まず教える」

まっすぐに落ちてくるひくうい声、おそろおそろ顔を見上げたら…

「お前、かわいいな」

大きな手のひらが、頬から耳たぶにあがって、肌の縁をくすぐるように撫でて。そのまま肩に降下下と思つたら、同じように今度は、首筋からあご、そして 唇をなぶつていった。

その目が、いつもの「目上目線」「俺様ライフ」そのまんまなのに、空いたもう片手が、指を絡めたがってる。

「これで何に作るんだ？ こんなに、俺一人で食わせる気か？」

引き寄せられたと思つたら、「夜は、俺と居ろよ。一緒に食べるんだろ？」聞こえた途端 長いキスをされた

それはもう、ながい ながーいキス。

お子様禁止の生々しいもの、とか じゃなくて、そりゃもう。。。

私自身が、前菜なんじゃないかって 思わせるぐらいの。

触れ合つてこすれ合つて 確かめ合うみたい な あまーいキス。

ああ、アタシって 本当に、この人に愛されてるんだろなあ
嬉しい、幸せ。ありがたい。
クスって自然に笑えてくる。ありがとう、こんな気持ちにさせてく
れて

伝えたい気持ちを一言でいうなら、これなんだろうなあ

「…愛してる…」

あれま。

あっさり言えちゃった。

しかも、涙のオマケつき。

あはは、あはははは

愛ってのは、案外 身近なところに潜んでるのね

たまには、フリフリしちゃうのです

毎日、毎日。

同じ仕事をしていると、いい加減あきてくる。

なんか、目新しい事がやりたいと思った時が、吉日。普段やらない仕事をやってみるに限る…

アタシの仕事は、物流センターの現場管理。常時75名のパートが働いている。

物がセンターへ入ってきて、保管して、オーダー通りに仕分けしてピッキングして確認したら、指示通りに梱包して、お客さんの所へ発送する。

センター内はずっと私の管理下だけど、たまに思うんだよね。

「この荷物（商品）って、どんな人の手に渡るんだろう」
正直、金属の塊だったり、よくわからない単語が並ぶ冊子だったり。自分には価値がないけど、確かにどこかでこれが必要としている人がいる。荷物が最後まで手に渡ってる、その景色がみれたら、もうちょっと気持ち入れて頑張れるかもしれない。

気持ちよく晴れた朝だった。

「ねえねえ、ちよつと出かけない？」

トラックの鍵をちらつかせて、あるリーダーへ声をかけた。

一番運転が上手そうで、一番：大好きだったりするリーダー。ひい、言っちゃた！恥ずかしいっ！！

あ、違うの。アタシ、彼氏？はいるけど、ね。違うんだ

働く姿勢とか、スタンスとか、話し方とか、がね。凄いなあって、尊敬しちゃうなあっていう「憧れ」の人。恋愛感情とかはないよ、

大丈夫、大丈夫。うん。
少しでも一緒にいれたら、色々学べるかなあと思って、うん。せつ
かくの機会だから、声をかけてみた。(言い訳がましいかなあ？
そんなことないよね、大丈夫だよね)

ホントに凄くてさっ!!

話しかけないと話さないけど、糸口さえ掴めれば、本当にいろんな
事を話してくれる。そのゴモットモな事、ゴモットモな事!黙って
淡々と仕事するその背中がカッコいいんだけど、話す言葉が働いて
いる時の背中とダブって、なおカッコいいっ!!

キヤー 大好きっ!

誰にも言っていないけど、たぶん、ウチのリーダーたちの中で作業能
力は一番高い。統率力は、ちよっと...だけど、さ。見た目のクール
さで分かりづらいけど、センター運営を考えてくれる気概は、1、
2を争うくらいの熱い人。

部下っていうより、仲間。きっと、向こうも、そう思ってくれてる。

「なに? 俺に、運転しろって?」

「違いますう! 私、運転しますから。でも、危ない時は見てほし
いんです」

一応、運転免許は持つてるわよっ、でも、日常的に乗ってる訳じゃ
ないし、トラックなんて、もっと乗ってないし。見てくれると心
強い...カモ?

「蕃昌サンの運転? 俺まだ死にたくないんだけど?」

うっ、そんなに信用がないのかアタシ。

「う、うるさいわね! アタシが、普段、フォークリフト乗ってる
のを見てるでしょ!」

「俺が見てるけどね」うっ、痛いところを突いてくる...

「でも、物損とか傷害とか、起こしてないのも知ってるわよね!」

「今のとこ、ね」

ニヤニヤと笑う顔がむかつく。確かに、彼の誘導のおかげで、無事故というのは、認める。

一番的確で上手いのよ。下手な人の気持ちを良く察した上で、分かりやすく誘導してくれる。

いつも、ジャストタイミングで「そろそろ、左後ろを気をつけて」「そのままでもいいよ」と言ってくれるから、急に「危ない！」で止められる事がない。

実は、思うのだ。「事故らないよう、簡単なルート」を事前に考えて、「今の蕃昌なら、このルートが取れるかも」実力が伸びてきたのを見計らって「じゃあ、誘導するよ」って教えてくれてるんじゃないかって。

「フォークリフトがトラックに変わっただけでしょ！ 行くよっ！」この男を相手にすると、素直にありがとうって言えないんだけど、ホントは頭が上がらないくらい感謝してる。

ま、この男も素直じゃないから、「あーあ、最後に見る顔が蕃昌さんか…」って言いながら「財布だけ持てばいい？」って行く気満々でいてくれるんだけどね。

そういう訳で、アタシはこのリーダーが大好きなのだ。

配達も無事おわり、担当者がいる事務所で受け渡しを済ませ…そこからコソコソと、受付でこっそりチラシとかポスターとか写真撮ってきた。

本懐は遂げたぜ。よく分かんないけど、とりあえず、こんな規模の会社とも、やり取りしているんだなあっていう実感が持てて良かった。

それは、連れてきたリーダーも同じだったらしく。

「ぶっちゃけ、忙しい時はやつつけで梱包してたけど、それって、

ヤバいのかも？って思ったりした」とか「よく分かんないけど、俺達の仕事って社会を支えてたんだね」とか、珍しく機嫌が良かった。そんな上機嫌が手伝ったのか。

地下の駐車場、並んで笑いながら歩く途中、ふと、リーダーが立ち止った。

背が高く、手足がスラリと長くて、ヒゲとか濃くないつつるの肌。キレイな男だなあって思う。

「どうし」たの？という間もなく、「いったーい！」

いきなりの痛みで、訳が分からなかった。分かるのは、シユコーン！と、おでこへ指先チョップが入ってきたらしい。しかも、見事に突き刺さったし！

「何よっ！」

突然、チョップが飛んでくる意味がわからない。

怒っても、「フッフ、はははは」と高笑いするばかりで、地下駐車上の低い天井には、良く響く声が楽しげに広がっていく。

「ひどーい」「いきなりとか、酷いんだけどー！」

でも、ちよつと本気で怒れない自分がある。このリーダーは、確かにいろんな意味でカッコいいけど、それは「お兄ちゃん」みたいな素敵さ。あ、それいい表現かも。

そう、「お兄ちゃん」なの。

「お前、ホントMだよな」

苛められても、「うん」とか素直に答えちゃう妹キャラが居心地良かったりする。

「Sの俺からしてみれば、蕃昌：お前はMだな」

立場上は、私の部下でも、オフの所で呼び捨てにされても、あんまり怒らない自分がいる。

だから、ついついワンコだったら尻尾ふりふりしちゃうのだ。

「ねえ、歴代の彼女さんって、みんなMなの？それともS？」

ちよつと気になる。アタシの会社のお兄ちゃんの恋愛とか、聞いた

くなっちゃう。

「付き合うまで、分からないままで、がほとんど。」

でも、ここで会話は止まってしまった。

彼の年でパート社員で…結婚なんて出来ないだろうから。彼の年だったら、付き合う女の人も、きっと、結婚を意識するだろう。でも、叶えてあげられないんじゃないかも…最初からしないのかもしれない…どこかのタイミングで、せめて契約社員には上げてあげたいな。そこから、正社員を狙える道を作ってあげたい…

「蕃昌サン？」ん？と顔を上げた時。「いったーい！！」もう一回、チヨップを食らった。

今度は、爪も刺さりましたけど…私、何かやりましたでしょうか？兄よ、貴方はS過ぎます…

「笑っていた方が、かわいいよ」

帰りの運転を始めようと、シートベルトをしたとき、突然言われた。

「…もつたいない」

突然、何を言い出すんだと、ちょっと身構えたけど、タバコを平然と吸い始めたから聞き流すことにした。

あーあ、兄さんの前なら笑えるんだけどなあ。ウチの彼氏？よく分かかんないから…

自分の彼氏？よりも、ウマが合って話せる男の人の前で、「可愛くみえる」になってもいいよね。だって、話せるんだもん。言い方悪いけど、引き出してくれるんだもん。

こーいうの、ダメかしら。

まあ、今の彼氏？には、徐々に慣れていくという方針で。

ちつと疲れるが、これが大人の恋愛なんだろうなあ

そんなことを感じた三十路の晴れたお昼前の出来ごと。

なんで ふうふうするんだ。 - 柏木視点(前書き)

たまには ふうふうしちゃうのです。の柏木視点 偶然ですが、あの時同じ建物に居たんですよ…

なんで ふうふうするんだ。 - 柏木視点

重役を連れて、重点客先の訪問へ行った時だった。

用を足しに行った重役を、地下駐車場の喫煙室で待ちながら一服していた。

「珍しいね、こんなところで会うなんて」

いきなり、作業服の男に話しかけられた。怪訝な顔をしたが、相手は、にこやかにまだ話し続ける。

「そつちは、これから？」

ああ、と生返事した時によく分かった。

「センターからの配達か…？ 外に出ることもあるのか？」

作業服の胸元に、会社のロゴが刷り込まれており、そういえばどこかで見た顔な気がしてきた。そういえば、彼女…ほんしよま蕃昌真知子の直属配下のリーダーの一人だ

「まあね」

分かりやすい愛想笑いで返される。

相手は、数回しかあつたことのない男。しかも、直接は話した事が無い。

顔は笑っているが、目が笑ってない。どこか、超然としている不敵な笑い方だ。

「そついや、出すものは出してもらえたの？」

数回しか、顔を見たことが無い男、しかも、相手は、現場で使われているパート社員だ。

タメぐち訊かれる筋合いもないはずだが、どこか腹が立たない。だれかに似てるな、この感覚。

「まあね」

そつくり、そのままの言い返して返してやった。…もしかしたら、自分と似ているのかもしれない。

「そうなんだ、良かったね」
また社交辞令じみた笑い方をしてくられた。…いや、俺じゃないな。
こんな安い社交辞令は使わない。

何だこいつ、と思いつつふとその笑い方が、自分の彼女と似ている事に気がついた。

特に「そうなんだ、良かったね」の言い方が。イントネーションもそう、単語の間もそう

。言ってから笑うタイミングも、笑顔の作り方も。

悟ってしまえば、ますます彼女と似ている気がしてきた。

本社の重役秘書という部署柄、社内の男たちから平身低頭される事が多いが、真知子は初対面から、向かってきた。噛みつくに近かったが、いつも目は、一途過ぎるほど、目的にまっすぐだった。

相手に物おじしないという態度では、目の前の男も全く同じだ。

ならば、これは話せる相手だろう。若干、彼女よりも喰えない男ではあるものの、悪い人間ではないのだろう。

「どうなんだ？そっちは？」

どうって？と、聞き返す顔に、貼りついた笑顔と探るような視線があったので、

「ざつくばらんでいいさ。上は、蕃昌なんだろう？ どうなんだ？」
添えてやる。

「ああ、蕃昌サン？」ニヤッと笑う顔が、どこかムシャクシャする世にいう『イケメン』に十分カウント出来るような色気のある顔だった。

元々、現場で体を使っている男だ。無駄な肉があるわけがなく、タバコを持つ腕だって、よく使い込んだ太さがある。かといって、ものすごい筋肉質に見えるというより、長身に小顔が手伝って、何かのモデルみたいだ。ちょっと小洒落た眼鏡が似合ってる。予備校関

係か、金融関係のポスターに出てきそうだ。作業着さえ着ていなければ、あり得るだろう。

こんな男が、彼女と同じ職場にいると思うと、少し妬ける。認めたくないが。

「いい子だとおもっよ」

ふふつと笑う顔が、若干気を使われている気もする。

すっごい嫌いとするっごい好きの瞬間があるけど… という前置きの後「苦労してると思うよ。本社の物流部、だっけ？ あんなのが上で、大変だと思う。」

俺は…と、話を続けられたが、半分聞きながら、目の前の男がどんなに油断できないほどいい男かしみじみ思い続けた。

まず、察しがいい。話が端的だ。能力が高いのも、伝わってくる。

そして、彼女を買ってる事に加え、今足りないことも正確に話せる間柄を築けている。

いや、そんな事で油断できないと思ったんじゃない。

「世話になっているから、恩返ししたい」

女が、目の前にいるような男から、直接言われたら、どう思うだろう？

もう認めよう。焦るぐらい、妬けてくる。

外見だつていい男で、1人で1セクション任されている程、仕事も出来る男。正社員じゃない方が不思議だ。

そんな良い男が、正面切つて伝えてきたら、どう思うだろう？

こんな男前の部下を彼女は抱えている。

この言葉だけでも、羨ましいを通り越して、「尊敬」してしまうがこの男気に彼女が流されてしまうのではないかと不安も同時に起きる。

もやややした気持ちが消えぬまま、俺は重役から電話で呼び出され、車に戻った。

動揺のあまり、車の場所を忘れて、何度も右往左往した。恥ずかしいことに、喫煙所から程なく大して離れていない場所だった。

トランクを開けて、頼まれたものを取り出す。

すると、聞きなれた声と先ほどまでの声がすぐ近くで聞こえてきた。

(あちらも、帰るところなのか)

地下駐車場の歩行通路の上を、並んで笑いながら歩く二人。自分の彼女とさっきの男だ。

背が高く、手足が目立つように長い男。程良い身長差で、ゆるい作業着の上からでも、抜群のプロポーションだと分かる女。

思わず、「手などつないでないよな」あわてて確認してしまう…大丈夫だった。

ただでさえ、美男美女の組み合わせだ。

さっき、喫煙ブースでちらりと見えた手は、長さや骨の太さも異なりながら、しつかりした男の大きな指だった。意外にも小さい爪だったが、手先が器用そうな気もした。その手が、彼女に触れたりしたら…

二人が、ちょうど車と通路を挟んで真正面の位置で止まった。

止まったのは、男が先だった。驚いた顔をした彼女に、彼女の顔面に、甘めにチョップを入れた。

すぐに上がる「いったーい！」の声。…あれでも、手加減した方だろうが、いきなりだった分、気持ちの面で痛かったろう。

「何よっ！」「怒る彼女を前に、「フッフ、はははは」と破顔する

顔が憎たらしい。

わざとだろうか、俺と直線距離で5Mも離れていない距離で、イチヤツクとは。

圧迫感のある地下駐車場だからこそ、なおさら響く声が耳についてイライラする。

追い打ちは、真知子の対応だった。

「ひどーい」「いきなりとか、酷いんだけどー！」
決して、本気で怒ってない。笑いながら、楽しんでいる様子が、見なくても伝わってくる。

この野郎、車の物陰から、出て行ってやるか。

こちらの感傷を、知ってか知らずか。

「お前、ホントMだよな」不敵なクスクスという笑い方と

「Sの俺からしてみれば、蕃昌：お前はMだな」上司相手に呼び捨てが、一層苛立たい。

「ねえ、歴代の彼女さんって、みんなMなの？それともS？」

輪をかけて、全く怒らない真知子を問い詰めたい。なぜ、嬉しそうに笑うのだ

「付き合うまで、分からないままで、がほとんど。」

お前みたいな男が、そんな仕草で真知子を見るな。真知子を惑わすな。

祈るような気持ちで、目をつぶった。

今は目撃しているからいい。

俺が居ないあのセンターでは、こんなやり取りが通例の様に行われているのか？

あの男以外、直接の配下はあと4人いる。配下以外にも男は多くいる。

どうしてくれる…！！

祈りを無残に散らすように。

「蕃昌サン」「いったーい!!」もう一回、チョップが入ったらしい。

「2回も食らうなんて、私って馬鹿かも」二人の高笑いが、渦を巻いて腹奥に吸い込まれていく。

「仕返しさせるーっ!」

彼女は、表面だけぷりぷりした表情で、チョップの手刀を作ると、男が観念した顔で、少しだけかがんだ。

しゅこん、刺さる様子はみせているが、ずいぶん弱腰だった。

あれでは、痛みなどある訳がないだろう。

案の定、「だめだな、ちゃんと爪をこつやっけて立ててね」寄り添って教えてる姿を目撃せざる得なかった

無防備に男の目を見て笑う彼女を見るのは、正直つらい

楽しそうに笑う顔は、自分に向けられている分には嬉しいが、違う男：特に、あの男となると、胃の中がグツグツ言っている錯覚を覚える。こみ上げる息が吐けずに苦しい。

(男の嫉妬ほど見苦しいものは無いな)

嫉妬される程、気持ちを伝えきっていない自覚はある。

いまいち伝わっていないがゆえに、値踏みされている印象もぬぐえない。

つらい。

嗚呼つらい。

ならば、どつする??

個人ケータイを取りだし、メール画面を開いた。メールは苦手だ。あまり使いたくない。でも、今はそれしか思いつかなかった。

「いま、何してる？」

男の嫉妬は厄介だ。

気がついた彼女が、笑ってくれるはずもないのに、俺はそれでも笑顔を見れることを祈った…

名前で呼ぶってのも、勇気がいるんですよ

「真知子」呼ばれて振り返った

声の主は、マイダーリン？ 柏木竜一（34）

待ち合わせ場所は、本社最寄りの駅前モニュメント

「おう、お疲れい！」

歯切れのいい気風が 我が物流部 流。

「何が、『おう、お疲れい！』だ。30になった女の挨拶か？」

紳士淑女の品格を重んじるのが、柏木所属の本社秘書課の流儀
なんでこんな二人が 一緒に居るかは、たぶん 七不思議レベルの
謎だけど、

きつと 両想い…なんだと思う…イマイチ 実感はないが。

最近見つけた、隠れ家風 ダイニングバーがある。

山小屋か、港のログハウスに近い、アウトドアめいた素朴な内装が
気に入った

インテリアも、使い込まれた年代物の登山道具や釣りセットがさ
りげなく置かれて

立ち込める息遣いのある生活感に 居心地の良さを感じる。

今回で3回目の店内、互いのお気に入りのカクテルで乾杯した

「柏木さんが、シャンディガフを好きだとは思わなかったなあ」

シャンディガフは、ビールをジンジャーエールで割ったカクテルで、
ビールが薄くなってサッパリしたカクテル。ただし、シヨウガの炭
酸ジュースで割ってる故に、油断すると酔いが回るので 要注意
私も、家でジンジャーエールの原液…ジンジャーシロップを冬になる

と作るから シャンディガフは嫌いじゃない。

一口ちょうだい、と断って 口をつける

「んー、美味しい！ ジンジャエールは、ウィルキンソンが一番好きかな」

香辛料が効いた辛口風味が、こみ上げてきて幸せな気分になる。

ふふつと笑うと、柏木さんも 一瞬だけ愛想笑いで付き合ってくれた

「ジュレップって、夏の飲み物だろ？」

一方、私のお気に入りは ミントジュレップ。バーボンベースで、レモンと砂糖、ライムを炭酸で割り、グラスの底へあらかじめ入れておいたミントを潰しながら飲む…という、まるで 酒の入ったスポーツドリンクみたいな清涼感

「柑橘系の甘いのも好きだけど、ハーブっぽい清涼感が好きなんですよ。」

ふふふ、と笑い続ける私を見る目が、下を向きがちだ。

「ど、した？」 気になって声をかけると「いや…」と歯切れが悪い。

「どーしたのさ？」 出来るだけ、勤めて軽く言うところ…

「お前は、現場系の姐さんなのに、俺にはたまに敬語で いまだに『柏木さん』なんだな」

うっ なんか、寂しそうにみえた。そして、胸が痛んだ。

腹わって、膝合わせて話しましょ、のガテン丸だし熱血体育会系職場なのに、彼氏？には、敬語で「竜一」と呼び捨てをしたことが無い

それはつまり。

人との壁を嫌うアタシなのに、アタシ自身が目の前の男と壁を作っている。

「竜一、ってガラじゃないんだよね、アタシの中で。」

苦し紛れの言い訳で時間を稼ぎながら、いつも通り鋭すぎる指摘に

心臓がぎゅーっとする。

ガラじゃない、っていうのは 言葉が違う。

『竜一』と呼び捨てに出来るだけの踏み込んだ彼を知らないだけ。知る時間はあった、あったけど、踏み込むための気が向かなかつたとつくに、答えは出ているんだよね。「彼氏？」って云いまわして
る時点で。

「リュウイチ…」

思い切って呼んでみる。ぎこちない音の羅列が 目的もなく彷徨って消える

だめだ、声に気持ちに乗ってない

その前に、恥ずかしくて顔が見れない。

失敗した恥ずかしさもあれば、自分の奥底まで見抜かれてる気まずさもある。

委ねてしまえば、楽なのに。それが出来ない、まだそこまで気を許してない自分がいるから、出来ない。

気がつけば、下を向いて イメージトレーニング。

「リュウイチ…」

ウチのセンターだったら、誰と似てるだろな

ストイック加減は、あのリーダーと似てる。

人に干渉されたくないプライドの高さは、あそこのリーダーとも似てる。

歴代の彼氏だったら…？ いろんな知り合いだったら？ 業者の担当者だったら？

今まで出会った、あらゆる男の人との「似ているところ」が、段々と積み木のように重なっていく。

やっと、おぼろげながら 形になりかけたところで 何かが見えた。

『柏木さん』は、ホントは 一人の柏木竜一で。

「真知子？ 何お前、練習してるの？」

なんか、無理してないか？と 逆に気遣われ始めたけど、今はあと少しだけ時間がほしい。

「ごめんね。」

『柏木さん』を、一人人としての『柏木さん』と見れるまで時間が足りてなくてさ」

あと、本当に少しできつと言える。

「『柏木さん』は、ホントは『リユーイチ』なんだよね。って、頭ではわかってきた所なのよ？」

残り僅かのシャンディガフを片手に「へえ」と鼻が笑う顔が、『リユーイチ』なんだと思う

「そうやって説明が出来るのに、煮え切らないのが、真知子らしいな」

そう、高飛車な目線だけど、ものすごく正確に人を見ている頭の良さが『リユーイチ』

ねえ

「もっと、甘い言い方してくれれば、呼べるのに」

「俺が悪いのか？ お前なら、俺を分かっているとってるのに」
人を褒めるのが下手な『リユーイチ』

「DSのチーフ殿に、なんで慣れなアカンねん」「突っ張るなよ。本当は、可愛いくせに」

ほらね、変な褒め方しかできないの。『リユーイチ』は。

『柏木さん』は、ホントは 一人の柏木竜一で。

私の前では『リユーイチ』という部分もみせてくれる人

まったくもう、といつの間にか 笑って目を合わせられる自分がいる
「人のこと、言えないでしょ？」

頭の良さに任せて、高飛車にならないでよ。

伝えたら揉める言葉だけは、誠実に伝えるのに、褒め言葉は素直に言えないんだから。」

カワイイと、分かっているなら 最初から「カワイイ」と言っただけじゃなかった

貴方にとって「カワイイ」は「好き」なら、私も貴方に慣れたのに。

「お前と違って、ストレートに言えないんだから、仕方ないだろ。頭が良い上に、察しもいい。俺が警戒されるのも分かるが、

人の目をそらさずに話す度胸がある女なのに 何を躊躇してるのかと思うとね」

本音でぶつかれば、本音を言ってくれる『リユーイチ』

「普通の人付き合いはともかく、恋愛になると…」そこで言葉を選んだ「慎重になるのよ、分かって」

そこまで一気に会話して。たどり着いた間になってようやく、最後の一口を飲もうとした。

「が、グラスを持つ手が、彼の手でさえぎられた。「呼べよ、名前です」

呼べるまで、飲ませない。意思を持った目だった

「…」

言葉がおもわず出ないほど、試されてる。そういえば、ここ数分の中で彼を呼んでいるけど、

声には出してなかった。

「リユーイチ、ムキに ならないで。大丈夫よ、基本スタンスは、貴方が好きだから」

多少作った顔に声だったかもしれないけど、今の精一杯を込めた

「ただ、ちよつと素直に言えてないだけよ。」

きつと伝わった。ほら、だって その証拠に鼻で笑わないもん。貴方の「鼻で笑う」は、照れ隠しで、素直にうれしい時は真顔になるのね。

もしかしたら、今は「真顔」に見えるだけで、本当は 細かい違いが毎回あるのかしら？

大丈夫よ、貴方が好きだから ちゃんと 違いを覚えていくわ

さーて、言っつてスッキリ。

ちよいと プレッシュャー無くなって余裕出てきたぞ。

ハテハテ、グラスを握ってる手をどかすには、どうしてやるうかな

思い立ってニヤリ

「焦って手が出たなんて、なかなか良いわね。嫌いじゃないわ」

どうせ、周りの客なんて 自分のテーブルの談笑に夢中よね

耳元にささやくそぶりを見せながら、「くふふ」頬にキスをした。

触れるだけにしようかと思っただけど、悪ノリして どさくさに一舐め。

掴まれてた手がゆる…む、箸が、ますます力が籠った。

ん？ やりすぎたか？

「いい根性してるじゃないか、帰るぞ」そのまま出口方面まで連れて行かれ…

帰宅どころか、リユーイチの家に帰宅になってしまったとさ…！
言わずもがなの作戦成功しすぎ。

「あーあ リューちゃん 喜んじやいましたか」って言ったら、「お前、ホント 生意気だな」って言われて 『寝かせてもらえない夜』になってしまった
34歳になってまで…以下略、ま そんなこの子も嫌いじゃないのよね

大丈夫よ、貴方の事が 好きだから

願いは叶う。ただし、祈った通りではないけれど 柏木視点（前書き）

柏木視点での初対面の話

願いは叶う。ただし、祈った通りではないけれど 柏木視点

小説本文 今でも、真知子は言う。

「貴方との『初対面』は、ホント 最悪な印象だったわ。

今、こういう繋がりになったのが、不思議でならない」

でも実は。

彼女には、一目惚れだ。

それは、彼女が覚えている「初対面」から 数年以上前に出会っている。

ただし、当時は 名前すら知らなかったけれど。

彼女を初めて見たのは、「この冬一番」と言われた寒い時期だった。自分の上司と一緒に、代理店業務の請負先を案内するべく、先方の重役を 物流センターへ連れて行った時。

その時、確か。

トラックヤードで、怒鳴り散らすドライバーがいた。

数十メートル離れた距離でも怒号が聞こえ、一方的にわめき散らしている。

それを、一人で話を受けている作業服姿の女性がいた。

女性と分かったのは、髪を束ねていたからと、明らかに 女性の細身の体格だったから。

一方的に、やり込められるだけで 可哀想だな、と思いながら 見守っていたが、

戻ってきた顔は 何故か 苦笑いで「やれやれ」と言いたげな余裕

さも見えたのが意外だった。

そこで驚いた以上に、一目みた時、好みの顔だな。と思った。これ以上は、無い程のストライク。

化粧に頼らなくても、目鼻立ちがはっきりと整っていて、どこことなく童顔。

きちんと手入れのしているきれいな肌に、髪の毛活発さと清楚さが程良く混じっている顔立ちだった

若いのに、こんな肉体労働の仕事をしているのか…

何歳なんだろう、高校とか大学に進学出来ない事情でも抱えているのか？

要らぬ同情すら、勝手に始めてしまうほど、ここしか働く所がないのか…？

こちらの物思いとは別に、先ほどのトラックは 程なく建物の荷受けベースへ誘導されていた

トラックには詳しくないが、聞くには4tロング車という車種らしい。

誘導する声が、女性なので また驚く…彼女だった。臆することなく、堂々と。

はるかに巨大な金属の塊が迫ってくるのに、慣れた様子で フォークマンが待ち構える位置まで誘導している。

自分好みの可愛い子がやる仕事は、どんな男でも見とれるだろうし、応援もしたくなるものだとおもうが、どんなに臆目で見ても、すべての手際が良かった。仕事振りが颯爽として気持ち良かった。

新鮮な出会いに、新鮮な発見。

面食らう気持ちだったが、これは 元々、先々で祝福された縁だっ

たからか。

この日は、ここで終わらなかった。

一度、彼女から話しかけられる機会に恵まれている。

この後、エレベーター前で彼女に「こんにちわ」挨拶された。

おそらく、適当に本社の人間が 誰かを連れて見学に来たぐらいにしか思っていないかったのだろう。

今から思えば、「余所行き」の顔だったとは思うが、その笑い方が柔らかくていいなと思った。

「このエレベーター、なかなか来ないんですよ」

気さくな世間話の合間に見せる表情が、素朴でいじらしい。

呼んでもなかなか来ないエレベーター。吹きさらしの倉庫1階の中、コート無しのスーツ姿は 無謀だった。

それを察してか「寒くないですか？」会話を繋げられた。

「もし良かったら、建物の四隅で、ヒーターを焚いていますから適度に暖を取ってくださいね」

大型の車を 一人で誘導していた活発な女の子とは思えないほど、ゆったりとした表情、気遣い

人懐っこい雰囲気をもとって、自然体で どころなく笑っている。

元々 良い子なんだな、と思った。それだけは、しっかり覚えている。

彼女は、バイトか何かなのだろう。もう、二度と会うこともないのだろう。

ただ、もし こんな感じの子が いつも そばにいたら良いなと思う。

初対面だけで「名残惜しい」と思ったのは、後にも先にも 彼女だけだった。

数年後、彼女の名前を知った。

あの時以来、始めて 物流センターを訪れた時だった。

社長方針にて、「物流センターの運営コストを15パーセント圧縮させる」その指令を伝えるため。

心の底では、「可愛い女の子居たんだよな」と、臍げに淡く甘みのある想い出もあるにはあったが、バイトだと思っていた事もあり、今でも在職してるかは 期待していなかった。

指令の伝達先は、「物流センター所属 蕃昌真知子チーフ」

当時の俺にとつて、物損報告や労働災害の報告書など、始末書・顛末書でも、名前を見かける方が多かった。いい印象は無かった。

そして、前評判では、本社の物流部が手を焼く気の荒い女社員という情報。

間違いなく反発してくるだろうと予想したのもあり、上から押さえつけようと 気を引き締めて乗り込んだつもりだったが…

「秘書課の柏木だ。蕃昌チーフだな？」

「失礼ですが、ご用件は？」

顔を合わせて すぐに失敗したと思った。

前評判通り、勝ち気な対応だったが、遠い記憶で出会ったあの女の子が 数年を経て、大人の顔でこちらを見ていた。

「本社の物流部では、話の埒が明かないので、こちらに伺った次第だ。」

まさか、彼女が…あの蕃昌？ 記憶が曖昧に薄れたとしても、あの

時感じた印象だけは、鮮やかさを帯びて一致する。むしろ、間違いない事実だと悟った。

後悔も確かによぎったが、もう引けない。

「作文の赤線引きならすぐ終わる。それに この経費15パーセントなら、人件費を20人工減にんくらせば、目処めどがつく数字だ。」

俺は、自分を追い詰める一言を告げた。

よぎる本音とは程遠い気持ちで

願いは叶う。ただし、祈った通りではないけれど2 柏木視点

「願いは叶う。ただし、祈った通りではないけれど」

この言葉は、昔の彼女が 別れ際に言った言葉だ

割りきった「大人の付き合い」しか、しなかった相手だったが、妙に心に残っていた

彼女との再会は、その通りだ。

確かに、再び会えるとは思っていなかった。それは、偽りではないそして、間違いなく願いは叶ったが、こんな再会を望んでいた訳じゃない。

本社の物流部から聞いた前評判は、確かに一理あった。

負けん気が強く、一筋縄でいかない部分はある。感情的になりやすい故に、それは、なお際立って感じる。

ただし、日常すべての面でそうかといわれると、それは違うと思う。

気の強さに任せて、立て板に水の如く言い返しもしてくる。

がしかし、そこには「盾を突く」不良めいた理不尽さは無い。

むしろ、推察力とともに理解力が高い。相手の立場と言いつ分の芯を見抜いた上で、質問をしてくる。

ただし、語気が強いので、過敏に鋭い印象が残りがちになる。

有る程度の揺るがない核を秘めていないと、そのまま論破されかねない。

彼女を取り囲む上層部に、問いかけられる質問へ適切な返答が出来るだけの人材がいなかったのだろう

手に負えない奴には 負えないかもしれないが、実務的な煮詰まった話をするには、いい仕事が出来る相手だと思う。話す言葉に表現

力も感じられるので、頭は良い社員だ。

それ以上に驚いたのは、とにかく良く働く。

それ故に、配下には慕われている。

すべては、自分の配下のために。同じ目線で「自分には何ができるか」一緒に考える姿勢が一貫していた。

上への自己主張も、配下の為に、繰り返してきたと言っても言い過ぎではないだろう。

その真摯な姿に、下が従ってきている。

総じて、「人柄」・「仁徳」と呼ばれるだろう優しさと強さが彼女にはある。

あの時、エレベーターの前で話しかけてきたのも、その一面故だろう

記憶の彼女と報告上での彼女。

まぎれもなく同一人物だ。残念ながら、良くも悪くも彼女の姿だ。

本社の物流部は、現場の視察をしていない。それゆえの評価だ。

上がってきた数字と伝えられる報告だけ聞いていたら、誤解を誤解で上塗りしているだけだ。

いつしか観察を通り越して、同情になり、それが、手元に置きたいと願望になった。

血の気の通った、熱のある管理者だ。育てたい、付き合いたい。

それだけか？ いやちがう、…一緒に居たい…？ そうなのか？ そうなんだな。

悟ってしまえば、清々しいが、こみ上げる胸の鼓動伝いに手先までしびれる程、想うと苦しい。

どうすれば、手に入る？ 鎮まる？

「願いは叶う。ただし、祈った通りではないけれど」
その願いもまた叶った。

ただし、円満とはいえない程、強引な方法を使った。

責められても仕方ないやり方だった故に、心を許されるまでの時間
的代償も高くついた。

ただし、願いは叶った。

万物、願いは、叶うのだ。

祈った通りでないことだけ、腹を括れば、願いは、叶うのだ

それが男の愛というらしい

いくらガテンな仕事をしているとはいえ、スーツ着ての会議・研修というモノがたまーにある。

本日は、本社主催の所チーフ研修。簡単にいえば、中間管理職を対象にした研修会。出来ればサボリたかった。お外のお日柄なんて宜しすぎるぐらい宜しいのに、会議室に椅子並べてる。もう、バチ当たるんじゃないかってくらいよ。

なんで、こんなに 本社呼び出し系集まりが嫌いか。

だって、今日の研修会、回った名簿を見ても 知らない顔ばかり。元々、物流部以外に知り合いなんて居ない。経理部・総務部なら、「記入してください」「内容、違いまーす」書類のやり取りで名前が売れているとかあるから、まだ 参加しやすいだろうけど。こっちは、マジ、孤独なお一人様よ！？ 営業連中は、営業会議とかで顔を合わせるからいいかもしれないけど、アタシは… 本社とは別住所の物流センター。知り合いが居ない。

ま、居るにはわよ。柏木っていう秘書課のチーフが。結構ちよくちよく会ってる、むしろ「ダーリン」と呼ばれる分類ですけど、会議は会議だし声掛けずらいのよね。しかも、向こうもまた、「顔と名前は知ってますが、何か？」的な仏頂面なの。

まーね、たしかに 付き合ってるのは伏せてるけどさあ…初対面の頃の仏頂面のまんまで隣に立ててご覧なさいよ、こっちが調子が狂うわよ。

あーあ、男ってのは、どうしてこうも 飄々と気持ちを切り替えられるのかしらね？

アタシ、憧れてたんだよねえ

社内恋愛だったら、お昼は、食堂とか外で一緒にランチしたりしてさ。「週末どうする？」とか相談する…とかつての。

付き合ってるなら、堂々と振る舞いたいし、ゴハンという就業時間中の唯一の楽しみくらい一緒に過ごしてもいいんじゃない？と思う。

毎日、ウザイかもしれないけど 週1とか 月2とかさ。

なのに、さ

ウチの相手と行ったらまあ…偶然、本社の食堂で会っても、シカトに近いビミョーな会釈とかだよ？ お前、アタシとの仲をそんなに公表したくないわけ？と何度思ったことか。

一応、肩を持つと「ただでさえ煩わしい本社の人間関係を、荒立てたくない」んだってさ！ 学生時代でも確かにこっさり付き合ってる子達とかいたしね、気持ちは分かるんだけど。

おっと、話がずれた

ゴハンの話じゃないんだった。会議の話よ、会議！

会議前とかの「懇親・懇談」の時間が一番嫌。アタシ、完全に外様なのよね。唯一の知り合いが柏木なのに、あの男は ツーンの一点張り。『自分で馴染めばあ？』『俺は手を貸さないよ』の無配慮が、どうにも解せないのよね〜

自分が知ってる人ぐらい、紹介してよ！ ったく冷たい奴だわさ！ あーむかつく。社内恋愛の彼氏だったのに、なんの役にも立ちやしないわ。

しょうがなく、名刺を持って 各参加者へ挨拶に回る。

話すネタなんて、有って無いようなモノよ。

総務相手に「いつもお世話になっております。」「先日の 〇〇の書類では、結構な根回しをお手伝い頂きました」とか、

営業部隊相手に「いつも物流部をご利用いただき、誠にありがとう

「ございます」「皆さんの売上の御陰で、生活が出来ております」とか、超卑屈挨拶。もちろん、ここまで卑屈に話してないけど、言葉の億の意図としては、そんな感じ。

どこの会社もそうだと思うけど、営業が一番立場が上で 補佐の部署は、ほんとに扱いが悪い。

物流なんて、ブルーカラーだからって意味で 末席扱いよ?! 納得いかないわよ。

経理は数字扱っているし、間違えられないから、上席に近くても文句言わないけど、こちらだって同じ「間違えられない」なのに、最下層扱いつてのは いけ好かないのよね。

あーもうヤダ。こんなお行儀良すぎる挨拶!

ちなみに今、目の前で調子良く笑ってるこの男は 劇的要注意人物! 都内の営業所の男なんだけど、こんにゃろー、いつも 発送受付のリミット後になってから「出荷指示」だしてくんの。しかも、「絶対 出してください」とか偉そうに言ってくるから尚むかつく!! ウチのパートたち、出来がいいから 無理受けもしぶしぶ通してるけど、さ。名前みるだけで、嫌な予感がする代表格!...なんでこんな奴に、友好的な顔をしなきゃならないのさ。

「蕃昌さん、いつもありがとね」ノリの良すぎる声。

「どーもー。ウチのパート達の残業代分ぐらい売上を回していただけているんでしたら、構いませんよ」

このままイヤミのひとつも言いたくなる...が、万が一 ウチがミスを起こした場合、謝る時を考えて、いまはグツと我慢。

「頼むね、これからも」うわー、ハイって言いたくない!「お約束できるときは、ね」

「またまた」。いつも出来てるじゃーん、完璧に」

あームカツク。次は断ってやる!できるオーダーでも断ってやる!

気が付けば、この会話で他の営業たちが集まってきた。わらわら…と、まあ。と言っている間にもう、すっかり囲まれてしまった。

「ぶつちやけ、最終って何時まで受けてくれるんですか?」「蕃昌さんに直接電話すれば、受けてくれるんですか?」「それって、地方・離島便もですか?」「直接の引き取りだったら、センター空いてる限り可能なんですか?」

「うわー、この囲まれ方嫌やわ」

「つたく、あのやろう!! 余計なこと言いやがって!! ギロつとならないよう気を付けながら、主悪の根源を見た。」

「僕、そんなに 無理言ってるっけ?」言ってる!!

「やだなあ、僕いつも時間厳守ですよ」どこがだ!

「僕、ちよつと面倒な注文なときは、蕃昌さんに一声添えてるだけなんで」

面倒どころか、ルール違反じゃないのさ! 自分だけ、紳士気取りやがって! このサル顔チビ!

引きつった顔をなんとか笑顔にとどめる。

「皆さん、規律と時間厳守をお願いします。完遂のお約束をできる限界が、出荷リミットなんです。」

「ごめんなさいね、と半分演技で申し訳なさそうに言う。残りの半分は、営業だろ! 安請け合いないで毅然と断ってこい! という怒り半分。」

「先日の経費節減で、パート達の全体25%を休ませながらセンターは、稼働してるんですよ。現行の戦力で、以前の量をこなしているんで、これ以上の無理を強いると、ミスと作業中の事故に繋がりがねないんです。特に出荷リミット後は、『ここまでやりきった』安堵で、全体の集中力が一番落ちてる時ですからね… 残業代払う以上に、大丈夫? って聞きたくなるのが、現場管理者としての立場です。」

「ちよつと オーバーだけど、そんな感じだ。」

分かれ、コノヤロー。あんたたちが、アタシたちの給料を稼いでるのは分かってるけど、アタシたちが居て始めてサービスが成り立っているんだよ！アタシたち、そんなん忘れて働いてたら、絶対、営業事務の女の子たちに嫌われてるでしょ？ 見なくてもわかるわよとはいうものの、なんか、まだ言いたそうだったけど。

「規則は、皆さんとの約束を守るために設けさせていただいています。」「改善の要望があれば、本社の物流部の意向が無いとこちらも動けません」

取り敢えずアタシは言いたいことを言ったし、取り合わないことにした。

だいたい、男数人が 寄ってタカって、ウチの物流センター運営にチャチャ入れてくるのが、筋違いなのよ。たとえ1個 倉庫からモノを出して送る作業だけでも、何人のパートの手を経由してるのかわかってないから、安直に 『なんでできないの』とか言われる羽目になるのよね。

だからといって、この場で「じゃあやります」とか、妥協するのも癪に触る。

なんでこんな目に合わなきゃならないのよ、本社にくるたびに…

ふと視線を振り返ると、会議室からリユーイチが出ていく姿が見えた。

ねえ、アナタにアタシは見えているの？ こんな空気、耐えられないよ。隣に居てくれるだけで良かったのに… 部屋から出ていつちやうんだ。なんか、無性にやるせなく寂しくて、落ち込みそうになった

「では、これで 座学は終了でして、別紙プリントの店にて有志の懇親会を行います」
企画してくれた総務には悪いけど、懇親会は、断るつもり。物流センターとしての立場も伝えたいし、ある程度のお礼挨拶行脚もしたから 役目は終わってる。なんでか知らないけど、営業本体のトップも来るらしいとあって、営業の皆さんは仲良くご連行。ザマーミ口。明け方まで拘束されるがよい！

「柏木くん、君もくるよね？」

秘書課といえど、重役の側近をやってるウチの相方も召喚されるらしい

「いえ、今日は外せない所用があります」ん？違うみたい

「仕事か？ 後にできないのか？」「身内に加減が良くないのがおりますので」

「見舞いか」渋々諦めた営業のエライ人の顔。あれまあ。行かないんだ、意外だな。

ふーん、そうなんだ。なんか疲れたなあと、エレベーターの場所まで向いながら、ケータイを見た。ああ 悲しいかな、ケータイはなんの不在連絡もなく。念のため電話してみたところで「今日、直帰ですよ。おつかれさまでした」と、構ってもらえないツレナイ様子。はあ、まあ 頑張ったみんなに罪はないので、一人でブラブラしながら帰ろうかな

呼んだエレベーターが来たとき「俺も乗る」隣に、さっきのエライ人を振り切ったらしいリユーイチが走ってきた。咄嗟に、開ボタンを押しながら、二人で入った

ガタン、と動き始めたエレベーター内は、全員降りて乗ったのは、私たち二人だけ

「身内に加減が良くないって、大丈夫なの?」「なにが?」

ようやく『彼氏』と二人つきりなのに、イマイチ 実感的なものがこみ上げたりしないのは、なぜだろう?

「さつき、懇親会断るために言っていたじゃん」「お前の機嫌が悪そうだったからな」

は? 若干意味がわからないんですが?さつきまで、散々 表情を我慢していたお疲れが、いつきに弾けた。我慢の関が崩壊したって感じ。

「だって、身内の加減が良くないって」それは、嘘だったとしてもさ。アタシの機嫌が悪いから懇親会出ないってのは、何か引つかかるわよ

「身内みたいなもんだろ、お前は。」

いやいやいやいや。嬉しいけど、身内にカウントは、早いだろ…、展開早いつてば。我に帰ったのは、フと音がする鼻声で、からかわらたと気がつく。

「よく頑張った。」 仕事中はまず聞けない優しい声が漏れてきて、思わず、目線を追った

「営業たち相手に、言い返してたろ?」くすぐるように、私の薬指の内側：肌の薄くて敏感なところを、なぞられて、思わず夜の行いを思い出させる。突然に、襲いかかるゾクゾクとした衝動、受け止めている反応を楽しんでいるように、毒のように甘い声はまだ続く「研修の類は嫌いなのを知っていた。立場が絡んだところで、秘書課の俺が直接手を貸すのも、筋が違う。だから、あえて放していた。ただ、なにか起きたら、シメるつもりだったが…」

耳や耳たぶに指がかかり、楽しむようになぶられる。掠られる感触や聞こえる音が、艶かしい。まるで、猟犬と草食小動物の間柄みたいな蹂躪。

「さつきの営業たちとの事みたいに?」やっと切り出した言葉を、ああという簡単な返事で済まされて、質問を試されるように促された「だからって」だからって、自分が懇親会をサボる理由にするのは、

違うんじゃないの？ 目で訴えるのを、かるくいなされる

「なかなかイイな。センターでも本社でもツンケンしてる。囲まれようが、我を通せるのに、二人になると、みるみる緩む。」

遊郭に並ぶのを品定めするような男の目。完全にいたづらられているのに、この場から離れられない。

エレベーターの中だから？この男の意図が知りたいから？構ってくれるのが嬉しいから？「アタシ、一方的は趣味じゃないんだけど？」なぜか、怒らない自分自身すら読めぬまま、言い返せたのは、それだけだった

エレベーターのドアが空いた。反撃も答えも糸口すら掴ませてもらえないまま、外気に放り出された私たち。意地悪オトコさながらの成りは、若干潜め、チーフ同士を相手にする顔に一瞬で戻る余裕が憎たらしい

「お前が最初に絡まれてた営業の奴、本当に手に負えなかったら連絡してこい。根回しは手伝ってやる。」

ちゃんとみてたんじゃん。会話だって、聞いてたんだ。

「あんな三下連中相手に、手を煩うお前でもないと思うが、な。一応だ」

心配もしてくれてたんだ。アタシのこと、買ってもくれてるんだ。

「武勢に多数で良く頑張った」

分かってくれてたんだ。

じゃあ。「夕飯ぐらい、付き合ってよ。ご褒美ってことで。どうせ、夜は元々空けていたんでしょ？」

「最後の一言は余計だ」ふふ、と笑われる

本当は、さ

エレベーターの中の意地悪とかじゃなくて、もっと手放しに褒めて

欲しかったんだけどなあ。

「じゃあ、余計ついでにもう一つ」「聞くだけ聞いてやる。」

「あの長い時間、一緒の部屋にいたのに 会話一つ出来なかったのよ？ エレベーターでも、そっけないし。」

「何が言いたい？」イラつとした顔をじっくり確認して、この男じや絶対できないだろう無理難題を一つ吹っかけた

「ゆっくり、時間かけて ハグして。」

クフフ。

やれるもんなら、やってみる。

でも、そうね、ちょっとだけ ハンデをあげようかしら「今日中でいいから」

フーッと呆れてそのまま卒倒しそうな顔をなんとかもち直しながらの仕草が、本当に予想通りで。思わず、アハハと笑ってしまった。いいわ、これで許してあげる。

社内にいるのに、仏頂面されようが、気にかけてくれるのは分かったし、本当に困ったときは、助けてくれる意思も伝わった。

この年だから分かる。これはきつと『男特有の愛』

手を出さずに、見守るだけが 実はすごく辛いというのが、この年のこの立場だから分かる

自分がやっちゃえば、早いんだけど、相手の力量と成長を信じ抜いて見守り続けるのが、いじらしくて 耐え難くて 我慢しつつけるのが すごく辛い。

なのに男っていう生き物は、そういう「実は辛い」経過が待ってることを、敢えて自分に課すのを『愛』だと思ってる節がある。

この男なりの『愛』が分かったから。今回は、今の趣旨返して許してあげる。

一人合点して、スツキリと笑う私。その空気とバツが悪いのが気に入らないまま、リユーイチはそのままの顔で言った

「何を食べたいか考えておけ。決めたら連絡しろ」それだけ言っ
て背を向けて、歩きだした。秘書課のある方向へ。

背筋が伸びた悠然とした歩き方：男の背中を見るのは嫌いじゃないけど、今のやりとりでこちらが一方的に見とれるってのも、なんかカッコ悪いのよね。

なもんで、私も歩きだした。同じ歩き方が出来てればいいなあなんて、願いながら、ね。

昔の彼女を見てしまいました

たまには、天気もいいし。そんな話になり、二人で出かけたある日の休日。

屋外テラスのカフェで、テイクアウトを買いに行った彼氏を 席から眺めていた。

あ、誰か女の人に話しかけられてる。

気付いたのもつかの間、どうにも面白くない感情がこみ上げてきた。

…一方的に話し掛けられた割には、長い。

あんまり兎や角言いたくないけど、不自然なほど、話が長引いている。

なんでこんなに イライラさせられるのか、分からないけど、イライラする。

相手が、ものすごい美人だから？

自分には到底ない女らしい華やかがあるから？

お化粧がバツチリ決まってて、洋服だって ゴージャスに着こなしちゃってるから？

超有名ブランドバックを、当たり前のように腕に下げ、

隙のない程 キレイに染め上げた長い髪を掻きあげた隙間から見えた 揺れるピアス

ドッキリするほど、胸元をきわどく魅せる服が、堂々と似合ってる。アタシにない外見の全てを持ち合わせている女が、彼氏と話をしている。

なんで さっさと戻ってこないの？

ふと 一つの結論がでた。

それと同時に、勝手に出てくる鼻歌が一つ。

「あの子、どこの子、気になる子。」

見たこともない子ですから、見たこともない 過去があるんでし
よ〜」

某有名CMの替え歌ながら、ツラツラと出てくる。

今のアタシの彼氏 柏木竜一 34才

自分で言うのも 非常に難なのだが、ウチの彼氏は 美形も美形。

十分に「かっこいい」と言える男だと思う

何ていうのかなあ、キリッとしてるんだよね。

鋭くて、子供っぽさを削いだような大人の顔。

しかも、仕草一つ一つが、変に色っぽい。動作一つとっても、優雅
で余裕さがある。

放つといっても、他の女が放らないだけの見た目を誇る。

アタシ、思うの。

あんだけの見た目を誇って生まれてくれば、

34才にもなった頃には、色んな過去と人間関係を持っているでし
よう。

そもそも 見た目に罪はない。他所で、他の女が釣れちゃうのも分
かる。

さぞや苦労しなくても「釣り上げちゃえてた」ことなんて どっさ
りあるに違いない。

そこを逐一文句を言うというのも 筋違いだろうし、生まれ持った
物以上に 本人が努力した「内面から湧き出るもの」だって 多少
なりともあるはず。

そこは、尊重すべきだ。

ただ、私が知らない面…たとえそれが 想定の範囲内だったとしても…改めて目にするるとシヨックなのよね。
あんな女たちと同列の勝負が出来るかというところ、さすがに自信がなくなる。

「悪いな、待たせた」

帰ってきた彼氏に一言浴びせた

「元カノ？」

「直球だな、他に思いつかないのか？」

凶星だったのか、苦笑してる顔がわかりやすい。

「もう少し、話してきても良かったのに。久しぶりなんでしょ？」

「気にならないのか？」

気にならないっちゃー気にならないけど。

そこで、言葉を切った。

「だって、彼女がいて、今の貴方がいるんでしょ？」

散々嫉妬しておいて、私もわかりづらい奴だけど、

「人との出会いって、多少なりとも その人の人生を変えていると

思うのよね。」

あんまり話し込まれても、こっちが困るけど

「色々な人との出会いと変化との積み重ねで、今の貴方がいるんだ

ろうから、それぐらいで目くじら立てないわよ」

ちよっと強がつてる気もしなくもないけど。

せめて カッコいい女でいたくて、少しだけ頑張って虚勢をはって

みた

御陰で、会話は全部止まったけど…

屋外テラスつてやつぱりいいな。

無垢な光と風がそのまま入ってくる。ささくれた心の刺も、抜いて取り去ってくれる。

こついうのつて、本当に助かるわよね。今なんて 特に思うわ。会話しなくても済むんだから。

感傷に浸ってたなら それを遮るように。

「真知子」

呼ばれて、ん？ と返事した。

「真知子、ちゃんとこつちを見る」

機嫌の悪い声。なによ、もうちょっと 気持ちよくいたかったのに

「なあに？」

少し他人行儀かもしれないけど、取り敢えず 作り笑顔で目を合わせる

「お前には、参った。よくわかったな」

珍しく素直だ。それに免じて、許してやろうか…何に？

「妬いたか？」

「妬いたつていうか、長いなとは思ったけど。」

「股とか掛けてないから、心配するな」

まあ、股とか掛けても アナタなら器用にこなせそうだけどね、という一言は また修羅りそうなので 言わずに置く。

「何で分かったんだ？」

女の勘か？ という返事を間髪入れずに遮った。

「仕事柄よ」

私は、物流センターで常時75人の配下（といっても パートさん達だけ）と付き合ってる。

ぶつちやけると、歩いてくる足音一つ、フォークリフトの動かす音だけでも 誰が誰か分かる。

人に言う気持悪がられるので言わないけれど、よくよく気を付けて音を拾っていると 分かるのよね。

職業病なのかもしれない。ここまでくるとね。

「仕事柄、人をよく見てるから。普段と違つと すぐに分かるのよね。」

いや、と答える声に動揺を感じる。

「お前が一番手ごわい」

そう？（それは光栄だわ。私ぐらいチヨロいとおもつた？）（）、と 再びささくれ立つた心の刺が毒をまとい始める。

あたしは、何に ささくれ立っているんだろう

自分でも、過去には感知しないつて決めているのに、どこかで 険しい気持ちか渦巻いている

彼に？自分に？

過去すら読めない彼に？ 彼の過去を読めないアタシに？

「悲しくなるぐらい、真知子が好きだ。我ながらね」

買ってきたコーヒの紙コップを揺すりながら飲む、目の前の男

「意味深ね」

悲しくなるぐらいつてのが。

「お前ほど 綺麗な人生送つてないからな」

あ、そう。聞いちゃいけない過去があるつてわけね

取り敢えず、心中いろいろよぎつたけど、なんだか、それだけ聞ければ 一旦良しとしようか…

それよしとする以外進めないつてのが 正確な理由だけどさ。

アタシントコに流れ着いてきたのも、理由があるつてわけで、人の縁なんて そんなもんなんだろう。

今焦つたところで、解決するとは限らない。

だつてそうじゃない？

よく恋愛で「アタシのどこが好き？」とか ついつい確かめて見た

くなるけど

過去の恋愛ひっくり返したところで「好き」に理由がないのは何
度も学んだはずで、

感情本位で生きていない男の生理に無理やり言わせたところでい
い結果を生まないのも見てきた

もう30才だもん

ちよっとは大人にならないと。

いつの間にか、街路樹をぼーっと眺めている自分の男に声をかけた。

まあ ちよっと慰めてやるか

さつき、「悲しくなるぐらい、真知子が好きだ。我ながらね」と、
彼なりに 謝ってきたんだ。

ちよっとは折れてあげよう

「あんだだけの美人を見たあとで、『好き』って言われても イマイ
チ頭が追いつかないけど。…悲しいくらい単純に喜べちゃうのよね。

アタシ、意外に、アンタの事好きかもよ?」

出来れば 笑って欲しい

出来れば 甘い顔して可愛がって欲しい

出来れば 照れてもいいから優しい言葉を言っただけ欲しい

欲は 腐るほどあるけど、世の中の恋愛は すべてから『好きだ』
と言わないと始まらない。

戻ってきた顔へ目を合わせて、念押しのようにゆっくり笑う

「ね?」

だから、貴方も笑って

返ってきたのは フット聞こえるいつもの鼻笑い。

「何を偉そうに」

ムード台無し。コノヤロウ。

素直に、ありがととか、そうだねとかいえばカタがついたろうに。

馬鹿じゃないの、この男。

まあ、この男とアタシが絡んだところで、

全部ギャグかコントになっちゃうのはいつもの展開なんで、みんな早く慣れて頂戴。

「そう？ さっきまでシオラシクしてたのは何だったのかしらうん？」

「お前な…」

「はい！ ごめんなさい、は？ こんなん、ガキでも言えるわよ。

ゴメンナサイ 言ったら許してあげる」

「あのな、何で俺が」

「煩いわね、こっちが真面目に話しているのに、ハナで笑った上に『偉そうに』なんて言われてご覧なさいよ。怒るわよ。」

「気難しい女だな、少しは察しろよ」

「いい年して、甘えるな」

「どうしてこつなる…」

「知らないわよ。…残念だったね、アタシに捕まって」

「全くだ」

あーあ、面白い

言い合ってるうちに、知らずと頬が緩む。

「意外に好きよ。こつやって 会話に乗ってくれるトコとか。

お互い不毛だって分かっているのに、テンポよく続くから 面白いわ」

もう一回目を合わせると、彼は途端に目を伏せて フーっとため息をついた。

勘弁してくれ、と言いたげだったけど、追求しないことにした。

ごめんなさいね、好戦的な女で。毎回律儀に乗ってくれる貴方も悪

いと思うから、敢えて言わないけど。

でも、ちょっと自信が持てたのは「少し歩こう」って、手を差し出してくれたから。

あんなだけの美人見たあとで、こんだけ言い合いして、手も繋いでくれる。

うん、今は アタシが好きなんだなと 信じられる。

シヨッピング街を歩いてしばらく、エスカレーターに乗った直後だった。

「不安にさせて、悪かった」危うく聞き落とすところだった。余りにも小さい声だったから
分かってくれればいいわ。

返事代わりに、手を少しだけ強く 握り返した。
すると。

私と握った手を おもむろに、リユーイチは、自分の口元に寄せて…
何をやりだすんだろう？ 興味新々に目で追っていただけに、驚いたのはこっちの方だ。

通った鼻筋に、長すぎる睫毛に見とれてたのもつかの間、明らかに
『誓いのナントカ』さながらのが、私の手の甲へ そのまま…

公衆の面前で、いきなり 何をするの?! ちょ、ちよつと 心臓に悪いわよ。

ヨーロッパじゃあるまいし、ここは 日本よ!?

「お前でも 動揺するんだな」

フフフ、と平然と笑われる。

「人前で、ハグしろとか、横顔に濃いキスしてきたり、振り回す割には弱いんだな」

まあ、アンタの鉄仮面、剥ぐのがライフワークみたいなもんですから… 驚かすためなら 何だってやりますけど。

って違うわよ。やるのはともかく、やられるのは、慣れてないのよ。

「わかり易い奴…俺も嫌いじゃない」

フッと笑う声が聞こえた気がしたんですけど、ちょっと何よ!?

「何いまの笑い方?! ま、でもいつもより ちょっとだけ甘い顔していたから 許してあげるわ」

「表情一つで 機嫌が直るとは 安いもんだな」

「いいの? そんな事言っ…? 下手な愛想笑いは ある程度、見抜けるわよ?」

と また 不毛なじやれ合いが続いたのは、別なお話。

適度にムカつく貴方が好き

どこの会社にもいると思うんだー

「こいつ、なんで　ウチ程度の会社にいるんだろっ?」「っつてくらい頭の良い奴。

大体、そういう奴に限ってさあ

その頭の良さに任せて　面倒くさい絡み方してくんのよね
いない?　そういう嫌な感じの奴。

いるんだわさ、ウチにも。

本社の秘書課にいるチーフ。

いかにも!　っつて感じの部署でしょ?

この男、確かに　頭は良いんだけどさ、

一言多いっていうか　要求してくることが　さらっとハードル上げてくるのよ。

「了解しました、じゃあそれで　作成したら　報告上げますね。」
っつて会話が終わった瞬間に

「ああ　言い忘れたけど、　も添えて提出するんだよね?」とか、
余計なおまけ付きが絶対くるの。

それがホントめんどくさくてさ

「それ、簡単に言っつきやがったけど…フツーの人　無理だから!」
っつて思うこと、マジでしばしば。

それにさー

これまた　サラッと「出来るよね」「ぐらいな風味で　言ってくるのよ。」

『この男、絶対に　確信犯で「根性出せば出来るギリギリの範囲」

を見定めて言ってきたやつたな』
明らか、読めるだけに 尚更ム力つく。

まあ… 残念なことに アタシの彼氏なんだけど。

来たくも無い、本社の会議。

何かねー 良く分かんないけど、「個人情報保護を万全に講ずるために」とかいう役職者会議に引つ張り出された。

うち、親会社が ソコソコでかいのよ。

グループの方針で「プライバシーマーク取得にむけて頑張るから、せいぜい 子会社も足引つ張るなよ」って訳でチーフとかの部署の実務責任者がごっそり呼び出された今日の会議。

あーめんどくさい。

アタシ、これでも物流センターの責任者やってるから、実は うちの部署が一番大所帯なのよね。

抱えてるパートにドライバーに、出入りの業者に…

付き合ってる業者の数は、総務といい勝負。

あー、完全に 目を付けられた気がする。

会議の休憩時間、自動販売機で水を買ったら 案の定 総務の人に話しかけられた。

「物流部さん、大丈夫だよな？」

… 大丈夫だよな？ じゃないわよ、大丈夫じゃないわよ。

制度そのものが 良く分かんないし、

どの程度まで 徹底しなきゃ分かんないし、

どこまで 現実的に実行できるかも分かんない。

「いやもう…」

本社相手に どこまで ぶっちゃけトークしていいか分かんないんだけど、まずは ジャブ

「今回、会議資料自体が細かくて面食らうんですけど…」

ホントね、うんざりするぐらい 細かい表が数枚きてる。

「うん、外部業者に作らせたから、僕もよく分かんないんだけどさー

そのうち、ランダムで外部監査来ると思うから しっかり目を通しておいてねー」

は?!

なに、その問題発言!?

超無責任な上に、責任乗つけるの!?

「提出、今月末で良いよね? まあ 月初第3営業日まで待てるけど、頑張ってみてよ」

は? 月末月初!? 一番忙しいんだけど!

こいつ、どこまでも 自分中心の他人事!

だから、本社つてきらい

げんなりした会議後。

本社ビル1階に入居してるコーヒーショップで 一息ついた。

だめだ、やってられない。

これは、まずい。

ぼんやり 甘く柔らかいシェードランプの光を見ながら ため息が漏れる。

トントン、と肩を叩かれて 振り返ったら「会議、お疲れ」リュウイチだった。

「お疲れさま」

とりあえず、笑ってみる。本音は笑うなんて余裕ないけど」

会議の出席者、見渡した時 この男いなかったんだよねえ
役職同じなんだけど、参加してなかったから コイツんとこの部署
は 平気なのかなと ちょっと心配したんだけど。

「さっきのって個人情報会議だろ？」

大した会議じゃないんだから 羽伸ばせたらうなと思ったんだけどな」

浮かない顔した私が気になるらしい。

「なんなの、あの会議資料。…読むのも気力要りそうだわ」

ふーっと ため息をついて 天井を見た。

ちよつとは共感してくれるよね、と思って 期待を込めて合わせた視線は…

「そうか？ 俺はそう思わなかったけど」少し 驚いた表情でこつちをみてる。

おいおい なんなのよ、そのリアクション。

むしろ、「なんでそう思うのか理解できない」ぐらいな返し方？

「法律の目的がしっかりしてるから、大した事ないよ」

はあ… 何なんですか、アナタのその余裕。

アンタ、あの配布資料みたら その気も無くなるわよ…てゆうかそもそも

「会議で顔みなかったけど、そつちは大丈夫なの？」

配られたプリント、見る？ 前言撤回するなら今のうちよ？」

「どうせ、概要は大方目処ついてたから 資料だけ先に回してもらつて 俺は 欠席した。

さっきまで家で寝てた」

なに、その余裕！

「総務課の会議で、中身が濃かった説明会って 今まであったか？
資料読み返せば 大方何とかなる事が多いからな」

まあ 半分その通りなんだけど、
普通、一応さあ でてりゃなんか分かるかなって思ったりするじゃ
ん。フツウ

こんな状況で休んでおいてさ「分かりません」とかなったら、それ
また損だし、
そもそも そんな自己責任怖いし。

「どうせ、総務も 自分のとこじゃ分からなくて人に作ってもらっ
たのが関の山だろ？」

クスッと笑う顔を見て、さっき 総務部の人と話した会話がフラッ
シユバツクする。

「そういえば、そんな事言ってた…」
ふう、とため息をつくような顔。

「『そういえば…』なんて、センスのかけらもない。」

考えればわかるだろ、が チラチラ見え隠れするこの冷やかな言い
方！

あームカつく。

だから。

念のため聞いてみる。「資料の内容は知ってるのね？」即答で「あ
あ」

もう一度、念のため聞いてみる。「あれ見て、萎えたりしない？」
やっぱり即答で「どこが？」

「あのさあ」「上手く言葉にならないが、とりあえず言いたい言葉が
ある。

「何なの？その 不思議なゆとりは？」

フフフッと不敵な笑いが ホントに不思議でならない。

「悪いな、俺 頭いいからさ」

「今日も一段とムカつくわね」

「そんな褒めるなよ」

「うわ、アンタ、面倒くさ！」

「何とでも言え」

「ああそうそう」と奴がいう

アタシの罵倒を意に介さないくらいサラツというこの顔・この口。

一瞬身構える癖が出来たのは、文頭の下り通り

くるぞ、くるぞ めんどくさい追加が。

「お前の所、監査の対象だから 手抜きするなよ」

キター！ ぷしゅー！

「それ、マジなの？」

秘書課で機密を知ってるこの男の情報は、嘘が無い。

聞くまでもないんだけど、毎回「嘘だと言ってくれ」と思っ

つい言ってしまう。

「ああ。お前の所は、一種 別会社扱いだからな」

あうあう、逃げられない。

あうあう、どうしよう。

この後、どうやって センターに帰ったか記憶がない。

ただ、ヤケになって 連日 残業しながら

「どうせ、こんな事が出来てればいいんですよ」

「総務課よ。お前たちも どうせ 中身は詳しくないんですよ」的に

投げやり感満載のまま提出物を仕上げ、さっさと送付してしまった。

監査なら監査しやがれ。

むしろ、その日に「ここ、ダメですね」「ここ、まあ…微妙に駄目

ですね」の検査項目教えてもらった方が よっほど今後の為だわ。

改善後の再検査で合格出ればいいんじゃない。

とにかく！ とにかく！ アタシは知らん！

後日、リュウイチから電話がかかってきた。

珍しく 仕事中に。

「提出の日付みて驚いた。 相変わらず雑な報告書だけど、良くあれだけの間で提出してきたんだな」

「どういう意味？」

褒めてるんだか、けなされてるんだか。

「褒めてるんだよ。 お前が忙しいのは 知ってるよ。 かなり萎えてたのも見てたからな。」

「短期間でさっさと出してきたから、一皮むけたな と思ったんだよ」

あら、珍しい。 手放しでほめてくれているのかしら。 未だちょっと安心できなくて聞いてみる。

「相変わらず雑つてのは余計だけど、さ。

今までと出来は同じだったのに、短期間で出したから、褒めてくれるの？」

ふ、とあきれたような笑い声が聞こえた。

「出来は同じとは言っていない。むしろ、手抜きだろ？ただ…」
言葉を選んでいるのか、間が空いた。

「踏ん切りがついて、思い切って一気に書いたんだろ？今回は。

いつもだったら、悩んでウジウジしたまま 期限直前か後になつて出してくるから、それよりかは良くなったなと思つてな」

「そりゃ…」

アンタみたいな頭のいい男は 涼しい顔して仕上げられるんだろう

けどさ。

ただ、何がミソで 何が地雷で だけ、要点さえ掴めれば ある程度の線までは 追いつけるんじゃないかなと思っただよなね。なもんで、毎回！小馬鹿にされる理由は、『要領』だと思う。

ヒントは「『そういえば…』なんて、センスのかけらもない。」あの時、『センス』って何だろうって思って、そのあと「法律の目的がしっかりしているから」って言葉でつながった。後は、「これを信じて書くしかない。」と自分の理解だけを信用して報告書を書いた。

半分、ヤケの勢いと変な確信だった。

「お前は、苛めると 本領発揮するからな」

「なにその断定的な言い方！」

「追いこみすぎると、泣かれるけど 迷いがなくなると、いい冴えを見せてくれる」

「アタシ、男じゃないんですけど。」

本社から遠隔で苛められながら ある種 育てられてるってのもムカつく…

「元々、頭はいい。ただ、よく迷ってる。」

それがもつたいたいなと思っただからね、今回で 吹っ切れてくれてよかったよ。

予想を越えていい成長してくれた」

…アタシ、アタシの部下だっけ？

褒められてるけど、みょーに嬉しくないのは なぜだろう？

でも、ま。

「お前は、『いい人』と付き合ったら ダメになる。」

少しばかり『悪者』ぐらいな距離感で付き合ってた方が、生き生きしてる。」

残念ながら 読まれてる通りなんだよね。

総務課を見切って、会議を休んじゃうような…この男の頭の良さには敵わない

何かと小馬鹿にされてるけど、

どうすりゃいいか 毎回作戦練って「追いついたるわ!」と、日々発奮。

そのネタをくれる事には、実はこっそり感謝もしてる。

…だって、毎日に退屈しないから。

匙加減ですら、握られてるってのも 癪に障るけど、

絶妙に加減が上手いのも 尚更 癪に障るけど、

適度に 手のひらの孫悟空状態で 遊んでくれると思うと、

コイツは もしかして リアルお釈迦様かも?と思えて、嫌いになれないのよね。

むしろ、この男が好きなんだなと思う。いろんな意味で。

「アンタって、ホント めんどくさいわね」

「お前は、『愛してる』の言い方は それしか出来ないのか? ふう。」

「…ホント めんどくさい男。」

まあ、そうなんだよ。

適度にムカつく 貴方が好き。なんだよ。

そいでもって 一つ気になる。

「なんでアンタが アタシの提出日、知ってるの？」

また秘書課の特権：社内機密を自由に知れる の乱用かしら？

「個人情報保守状況を、外部監査に見てもらった話が上がってる。

お前のトコを、監査対象に挙げたのは 俺だ。名前を出した手

前、心配でね」

は？

「元々、大所帯抱えてるんだから、遅かれ早かれ対象になる。

この状況で先発なら、貧乏くじかもしれないが、今回のみ専門家か

らコツテリ教われるから いい勉強になるぞ。」

アンタねえ… アタシの面目は どうなるんだ。

「どうせ、『改善後の再検査で合格出ればいいんじゃない。』ぐらい

で提出してるんだろ？」

うっ、心の声すら読まれた！

「だったら、その通りのチャンスを渡しただけだよ。」

まあ、うん。まあ…

色々と 殺気を帯びてはいる気はするが…

適度にムカつく貴方が やっぱり好きな気がする。

「元々、一番良く働いてるんだ。

人に教わって直接直してもらった方が、正直、楽だろ？ 他の部

署は、独学させておけよ」

うん、やっぱり、貴方が好き。

素直いえばいいのに。

素直いえばいいのに。

都合が悪くなると嘘を吐くのが女なら 黙るのが男だと思う
黙るだけならまだいい。

素直に言わない時は タチ悪いわよね。

今日は、4半期に1回のド・ハマリデー 通称「一斉出荷」
いくなれば、

大口顧客のお客さんたちが 四半期決算にあわせて 大量のお買い
物をして下さる関係で

我が物流部にも たいへんな煽り…おっと、ゴニョニョ…お仕事を
頂く、期間なんですよ。

今日も時計は21時半をすぎただいぶ経っている

やっと 今日が終わった… なんか 気持ちだけが焦って

時間の経過が早かった気がする… 明日もそうなのかな

その感傷に浸っていたら、リーダーの一人が「お疲れ」と声を掛け
てきた。

パートの殆どは もう 帰した。

上司は 「早朝便は 俺が見るから」と先に帰って貰って、今は
私とリーダーしか居ない、閑散とした事務所

「後、誰も 残ってないよ」

最近お気に入りウィルキンソンっていうジンジャール片手に、

「あげる」って言われて。

何のてらいもなく 椅子を隣に引つ張つてきて ストンと座られた
「今から帰ったら、何時になるの？」

顔をのぞきこまれて、「疲れた顔してる」だって

ちよつとシヨック。そして、動揺した。

隠したつもりはないけど、今は「無理してる」って聞こえた。

確かに疲れてるけど、弱ってる時に、男の人に至近距離で近づかれると ちよつと身構えちゃう。

甘えなくなるし、弱ってるのが暴かれてるみたいで。

「さあ… 日付が変わる前に布団は敷けそうだけど？」できるだけ
ゆつたり笑つたら

「送つてあげようか？」って言われた。

遠くで、ドットプリンタが納品書を吐き出す音が聞こえる。実は、
あれが止まらないと 帰れない。

思つてもない有難い申し出… なんだけど、待たせる訳にいかない。

「知ってるよ。だから、蕃昌さんは 自転車を通っているんでしょ？」

そう。それもあって 実は、片道15キロを45分とかで通ってる。
ロードバイクっていう 軽量のスポーツ用自転車なんだけど。

これなら、終電も終バスも気にせず マイカーに係る諸経費（笑）
も気にせず 自分の時間で通勤出来る。

それを先回りして察したのか、リーダーは口を開いた

「俺の車に積むといいよ。さっきの通り雨で路面濡れてるから コ
ケるかもしれないしね

ゆっくり、話でもしながら 帰ろうよ」

「ゆっくり話」かあ

このリーダーの部署が 一番無理をさせてる。
アタシが大卒で入社して、物流部の配属になって 何故か 物流センターで働くようになって。

オペレーション（いろんな伝票の出力とかね）だけの仕事だけじゃ満足できなくなったから

現場管理もやるようになった時、育ててくれたのが このリーダーだった

他にも、いろんな人が助けてくれたけど…

いつも 一番言いにくいことを言ってくれて、

黙って泣かせてくれたり 黙って辛い部分を引き受けてくれたりもした

感謝してる。今の上司が「親父っさん」なら このリーダーは「兄貴」だ。

送ってもらうのは ちょっと 申し訳ないけど。

「わかった。ありがとね。」ちょっと考えてから 返事をした。

二人で出た事務所。

時間は22時…とづくに過ぎました。

こんな時間に 女の子（っていう歳でもないけど）が 事務所しめるなんてね、人使いの荒い会社だこと。

雇われセンター長は 辛いですよ。

「ごめん、一本電話していい？」

電話の先は 彼氏、こと 柏木竜一

本社秘書課のこわい鬼。もつといえ、仕事ダイスキな般若か
明王。

どうせ、まだ会社だろうと思つたら・・・

「こんな時間にセンター出るなら、連絡ぐらいしろよ。」

もう、自宅だったらしい。珍しいな。あ、そうでもないか…世間は
22時なんだもんね

「ごめんごめん、四半期のシメでさ〜」明るく話を続けたつもりが
「もう 帰れるんだろ?」

若干不機嫌な声で 話を遮られた。
なんか…むか。

「うん 帰るよ。」

セクシヨンのリーダーが 帰り道に落としてくれるって。繁忙期
の短い時間だしさ、話しながら帰ろうって言ってくれてる」

「ふーん」

さつきより さらに不機嫌になった。何で?なぜに? 私、何か
地雷踏みましたか?

「遅くならないようにしろよ」

「大丈夫だよ、明日もあるし。話つっても 引張るのも悪いから。」

聞いているのかどうなのかも分からない間が空いた後、「じゃあな」と言われて。

「うん、着いたら電話するね」も言い切らない後、電話が切られた。
なんで あんなに機嫌悪いんだろう。

とうに表示が消えた画面をみながらつぶやいた。

一瞬ちらつく「男の嫉妬」っていう単語

こんな遅くに 彼氏じゃない男に送られるってのが 嫌なのかな。
いや…でも ちゃんと仕事で遅くなっただけだ。

別に やましい事はないのに、なんで こんな仕打ちあつのかしらん?
だったら お前が迎えに来いよ。

先に連絡して「駐車場であつてるから」言えよ!

そんな私情を 自分の手足になって動いてくれるリーダーたちの前で言えるわけが無く。

顔に出さないように、でも 心の奥底で引っかかりながら。会話を楽しむ余裕もそこに 車は自宅の前についた

何度も乗ったことがある見慣れた外車が ハザード焚いて待ち構えている。

「ウゲ」血の気が引くのがわかる。

「何が？」リーダーが 同じくハザード焚きながら車を止める

「彼氏、来てる」「一本電話したんじゃないの？」

まあ、そうなんだけど… その言葉が どうつなげていいか分からない。

リーダーが まあ別にいいんだけど。自転車下ろすよ、と平然と促してくる。

「駐輪場、契約してないんだっけ？部屋まで運ぶ？」

「いや、慣れてるから 大丈夫。」

「じゃあ、蕃昌サン 彼氏なんとかしなよ」

「うーん」

電話したら「今行く」とブツッと切れた。

ほどなく 暗がりから 姿が見えた。ラフなジーンズにTシャツ姿。

リーダーがサラっという

「また会ったね、秘書課の… 柏木さん… だっけ？」

「ああ、遅くまで そちらも大変だったな。 連れが世話になった。

ハタから見ると 美男二人が並ぶ。けど、この二人が夜中に ここ

にいる理由つてのが 私つてのは 結構 居心地悪いよ。

だつて。

初対面者には 愛想笑いしかしないリーダー と 愛想笑いもしないウチの彼氏。

ただでさえ、合うわけがない。

「リン兄、ありがとね」

リーダーから自転車を受取りながら、どうにも 平和的に見えない男二人の間に立つ。

「うん、じゃ お疲れ」

相変わらず 完璧な愛想笑いの一方で 彼氏がすかさず自転車を取り上げる。

これは、俺がやる、とでも言いたげに。

その様を崩れない愛想笑いのまま「柏木さん、またね」手を上げて

リーダーは帰っていった。

ハザードが消えて、車が見えなくなる。

ビミョーな沈黙が 異様に怖かった。

自転車を部屋に入れてもなお 沈黙は続いている。そう…当たり前前のように 奴が部屋についてきた。

(アタシ、寝たいんだけど)

それも言いつらい、夜更けの来客。

いい迷惑かもよ？

「で、不機嫌な理由は なんなの？」

さっきのウィルキンソンをグラスに移して、氷を入れて 二人で飲

む。

理由は一つ。「夜遅いのに、部下から送迎されるな」

「アンタ、よく言うわね！」

接待の時は、自分の上司を送迎してるんでしょ、自宅まで。「言い分はわかるけど、お前には言われたくない！」

「部下を心配しろって話だよ。」

あの男も、明日も遅くまで作業あるんだろ？寝不足なんだろうから、まっすぐ帰してやれよ」

「だって、話……最後まで言わせてくれなかった。」

「閑散期入ってからでいいだろ」

「そういう問題じゃないんだってば」

「あのセンターからこの家まで 15分とかの距離だろ？ 大した話できないだろ」

リン兄の好意に甘えた私も悪いかもしれない。

でも、アタシだって 一人で5人のセクションリーダーを抱えて

その下には それぞれ20人前後のパートがいる

その大所帯の実質の長やつてるんだよ？

どこかで フツの三十路の女の子（女の子って年うじやないか）に戻りたいよ

職場の配下の下じゃ 本当はマズイのかもしれないけど、一人で抱えきれない毎日の疲れを 誰に漏らしているの？

どうせ、アンタに言ったって分かってくれないんでしょ？

泣きそうな気持ちで 残り少なくなったジンジャエールの泡を見つめていた。

沈黙を破ったのは リュウイチだった

「俺は お前の仕事を直接手伝ってやれることは出来ない。」

でも 遅くなるときは 連絡ぐらいしろ。迎えに行く。風呂と

飯の準備も 助けてやる。」

心配してたんだ。だったら 言えばいいのに。

「ありがとね、気にかけてくれて」

「分かればいい」

でもさあ？

もっといえば、あの時「ふーん」で 怒らなくてもいいと思うんだ
って それを言ったら、また喧嘩になるから。

「迎えに行くって 先に言ってくれれば。」

リーダーとも違ったやり取りになったと思うんだけど、どうか
しら？」

しばらくの沈黙の後、

「分かった。俺も 言葉が足りなかった。悪かった」
むこうから謝ってきた。ただ。

「もうすこし、自分の男を信じろよ。」

なんで、『仕事今終わった。遅くなる』『帰り道、送ってもらえ
ることになったから』突き放すんだよ」

あら、思わぬ本音

「だって、悪いじゃん。なんか、申し訳ないんだよね

そっちだって 毎日 日付が変わる前に家の電気をつけられるか
どうかの生活でしょ？」

そんなん続いているのに「今終わった。迎えに来て」家の前で「じ
ゃあ また明日」なんて 頼めると思う？

「休みの日に 適当に俺んち来て、やることやって じゃあね が、
俺たちの関係じゃないだろ？」

お前がキツイ時は 何か助けになることとしてやりたいと思うよ、
男なら」

わかんない。男の優しさって分かんない。

だって、アタシの睡眠時間1時間程度の為に、わざわざ来てくれてさ

それで「じゃあ」笑って帰れるなんて おかしいよ

そんな労力賞味2時間くらいのために ご足労なんて 申し訳なさ過ぎて 呼べないよ

理屈に合わないじゃん。損得も損、大損じゃん。

下心なら分かるけど、親しい仲なら なおさら 頼んでいい事と頼んじやいけない事がある。

でも。

しっくりこないけど、こういう事らしい

「リュウイチだって 大変だと思っただけど、アタシは リュウイチを頼ってもいいの？」

頼って欲しい、困った時に顔が浮かぶ一人になりたい。そういうことなの？

メンバーに入れてない苛立ちで リュウイチが機嫌悪いという事らしい

「ホントに分からなかったのか？」
うん。

「だって、アタシの理解を越えてる」

ふう、そうか と流れたため息。話も話題を変えようと思ったらしい。「お前、飯は？」

「食べてない。」

だよな、と 優しいような呆れたような苦笑い。

「風呂準備してやるから、先に この弁当食べてる」

え？ いつのまに？ そんなん、用意してくれてたの？

「ここに来るとき、秘書課で鼻屑の小料理屋で 弁当へ詰めてもら

った。

味は 安心して食べられるから、しっかりと 飯だけでも食べ
お、おおう。

広げられたのは、取り急ぎのタッパーとは言い難い ちゃんとした
お弁当箱。

むしろ 料亭でお通しとか入っていきそうな塗り物の容器…ああいう
の、なんていうんだっけ？

行き慣れてないから 名前も出てこないくらい。御櫃だっけ？
黒い艶だつて タダものじゃない。これ、how mach?

ツヤツヤの煮物、ぷりぷりの焼き魚、まだあつたかいご飯。
すごい。これ、ランチ料金だったら 2000円いっちゃんよね？

もしかして。

「リュウイチ…！」

ありがとうを言おうと顔を上げた時は リュウイチは 背中だけだ
った。

お礼を言うのすら 伝わらないくらい 颯爽と風呂場へ向かっていた

もしかして、照れくさい？

そうなのか、そうなんだろうな。

男って、どうして こんなに「意味が分からない」んだろう

素直に話が出来たら この男 特上のイケメンなんだけど。

素直にいえばいいのに。

都合が悪くなると嘘を吐くのが女なら 黙るのが男だと思う
黙るだけならまだいい。

素直に言わない時は タチ悪いわよね。

人間、素直にいえばいいのに、ね

綺麗に花みたく飾り切りされたニンジンも 口へ放り込みながら思った。

私は、素直に ありがとう って言えるようになるうって。

同じありがとうでも、ちゃんと 説明出来る「ありがとう」を言えるようになるう。

でないと、アタシの「ありがとう」が 安っぽくなりそうだから。

でもやっぱり。

素直にいえばいいのに。

口の中のニンジンも、「そうだよ」と言いたげに 甘くうなずいた気がした

意識せずには居られない

本社の物流部から連絡が来た

「例の件、上申書を早急に提出して欲しい」

あーやだやだ、『報告書』ってやつ。

あのね？ 現場で働いている社員のPCスキル、分かった上で連絡してきてるの？

メモ帳 と ワードの差がいまいち分かんないアタシ。

それぐらいのレベルなのに…

事務系OJならまだしも、倉庫現場で 陣頭指揮取ってるのが仕事よ？

それでも私に 入力をやらせるか。

あーあ

それぐらい 本社で書いて出してよ。

この前、何で 稟議を通してほしいか きつちり説明したじゃん。

アタシ、文章を書くの、苦手なんだし 打ち込んで 体裁整えてと

か 苦手なんだよね。

ただでさえ、元々 通常業務内では そんな時間が無いんだから。

「手書きで良いですか？」って言ったら 却下された。

「現場で使っんでしょ？」

経費は 物流センター持ちのモノなんだから、それぐらい 物流センターの名義の上申書だしてよ。

遠回しに 言われた。

ごもつとも。

ごもつとも、を盾に 仕事を増やしたくない魂胆丸見え。

：使えない窓際管理職の巣窟：本社 物流部

泣いても時間の無駄だな：悟ったアタシは、腹をくくった。

内容を組み立てるのに 時間がかかるのよね。

今回ののは 数字使ったぐいの報告書じゃないから まだ 命拾いしたけど。

伝えることは整理できてる。後は 打ち込むだけだ。

どうせなら、本社に書類を取りに行くついでに 本社物流部から最新鋭のノートパソコン借りて、1時間 会議室を押さえて 一気に仕上げてしまおう。

思い立ったアタシは、本社のミーティングルームをすぐに予約した。これは、社内ウェブから押さえることが出来る。電話も鳴らないし はかどるぞ、ウヒヒ

プルルル

押さえたはずの会議室なのに 内線電話が鳴る

電話の先は、秘書課だった

「物流の蕃昌ですけど、重役会議なら 今日じゃないみたいですよ？」

間違い電話だろう。なにか言いたそうな口ぶりだったが、時間が無いので強引に切らせてもらった傍で。

「悪いな、邪魔するぞ」

秘書課が電話してきた意味が分かった。

「俺が会議室押さえようと思ったたら、お前が先に押さえてた。だっ

たら 一緒に仕事した方が好都合だろ」

「何のために 会議室押さえたんだか」

誰にも邪魔されなくて 報告書を作ろうと思ったのに。

「どうせ 物品購入の上申書だろ？ 俺なら20分で書き上げるけどな。」

鼻で笑うような、挑戦的な言い方、ムカ！

「貸せ、添削してやる」

貸せと言われても、渡せるのは 箇条書きで要点だけを書き連ねただけのノート。

おもむろに、胸ポケットのボールペンが 抜き取られた。

「ふーん」

感情の入ってない声が漏れてきて、長い指がペンまわしを始めた

まるで バレエか新体操を鑑賞しているような気分。

手慣れた連続技が次に繰り出されて、何を魅せてくるのかますます食いついてしまう

ふと、いきなり ペン回しが止まった。

「この手の書類は、電話で済まないから、書面を求められる。その意図を考えろ」

物流部で止まる書類と思ってるのか？ つっけんどんにノートを返すその顔へ

「どうせ、本社物流部のことだもん。自分たちじゃ重役へ 説明出来る自信がないから、現場に書けて言ってるんでしょ」
用意していた通りの言葉を返す

「そこまで分かっているなら、ますます 専門用語へ頼るな。」

「短く、分かりやすくって 難しいんだもん。」

「全部伝えようとするからだ。要約は俺がやってやる。いいから、言葉をもっと噛み砕いて ざっくばらんに並べてみる」

そこから先、ノートへもつと 単語を並べていったんだけど…伊達に「20分で仕上げる」と言い切ったわけじゃないらしい。私の取りとめのない説明を だまって聞きながら、「要はさ」単語を太く囲われて、「提出の構成が」矢印が 文脈の流れを指し示していく

それと、キーボードへの入力も速かった。

本社物流部から借りてきたっていう「最新鋭PC」とは言ったけど、世間的には 最新鋭じゃないから、決して、反応速度が速いわけじゃない。

なんだけどさ、見る見る間に 白紙の画面が文字の羅列で埋まっていく。マジで神掛った正確無比なキー入力。

それは、打ち込んだでは、適材適所の文脈へ マウスで送り込まれる。

見たことも無い処理の速さに、驚いて本人の顔を見ると、別段一心不乱に打っているわけでもなく。

どちらかといえば、いつも通りの無表情が、少し 瞬きが少ないくらいか。

あつという間に、A4一枚を示すまっさらな画面は、それっぽい書類の表示に化けていた

打ち終わったんだろう、添削が始まる。

キーボードから両手が離れた。

先ほどまで エンターキーばかり打っていた右薬指が いやに目につく。

指輪とかしたら 似合いそうな手だとか、余計な事を考えてしまう。腕組みをしたかと思えば、人差し指が 文脈を追っている。

「読んでみる」

それが終わりの合図だった。

読んで一瞬で、『出来る奴』の報告書だと思った

そっけない位文字数が少ないのに、カッチリと情報を伝えてくる。子気味よいくらいストレートだ。

流れがあって 迷いが無い道筋に 思わずうなづいてしまう。

「ひっかかるどころ、ないか？」

私が止まったのは 要望、と書かれた部分だった。

ニュアンスが違うんだよなあ…、いいたいのは まあその通りなんだけど

そこまで 確定した状況じゃないから 強くも望めない立場があるだよね…

「もうちよつと 逃げ道がある言い回し、無い？」

なるほど、と 薄く息をはくと、

何パターンか、言い回しを替えた表現を候補へ挙げてきた。

つくづく すごいと思ってしまうた。

普段は、必要最小限の文章でしか そっけなく会話しないのに、ダムが堰を切ったように言い回しの幅というか 引き出しを持っている。

口からでる単語、一つ一つの選び方が 繊細でかつ迷いが無い。

まるで 城の城壁。

寸分の狂いもなく単語が横並びになり、文章として組み立てられ、その上へ更にまた 新しい文章が重なり、段落として成立する。

それがまたさあ。完璧な石垣か壁の如く 隙がないのよ。

うん、凄い。

すごいよ、アンタ。

唸っている間に あれよあれと 本当に報告書は終わってしまい、
「もう無いか?」「無い」

数少ない表情の中で あれは 夢中になっていたんだと気がついた。

「メールでいいだろう?」

部屋の片隅からLANケーブルを持ってくるように促して、しっかりと私の名義で 物流部へメールを送る

「リュウイチって」

ん? 目が合う。一仕事終わって ほっとした時は、会社の中でも
こういう表情するんだ…じゃなくて。

「仕事できるんだね」

ゆるく顔が破顔して、今の言い方がいいな と声を立てて笑われる

「まあ お前が頭の中が整理できた状態だったのは 楽だった。どうせ 1時間ここを押さえてるんだろ?」

ゆっくりしていけよ」

USBをはずした手が そのまま 私を見るための頬杖にある

パソコンを落とした手が、頬に掛かる髪を耳へと掛け付ける指になる
いや、恥ずかしいって。その展開。

ちらつと 顔を見たら、直視したらこっちが爆笑しちやいそうな、
あまーい顔だった。

会議室は 一時間きつちり、ありがたく使わせていただきました。

いやね、期待するようなことは無かったわよ

だいたいね、残り30分で そんなことできると思う?

それに、この男も 「45分から会議で使いたいから 早く明け渡してほしい」って言ってたくらいだもん。

あらやだ。何 想像したのかしら?

まあ、大人だったらご期待するものかしらと思って書いてみただけよ

あはは

これだけじゃ 意地悪よね、じゃあ ちょっと書くわ

「俺が打ってる最中、ずーっと 見つめられてたのに 書類が終わった途端に 見なくなるとは、冷たい奴だな」
だつてさ

いや、あの。

意識しちゃうのよ、ああいう うん、明らか「仕事できる」強い人
オーラにアテられたら。

なんか顔が赤くなっちゃうくらい、カツコよかったなと 思っちゃ
う。

はあ、本人に 恥ずかしくて言えないんだけどね。

「困った顔のまま、こっちを見ている顔は、意識せずには いられ
なかつたけどな」
ふっと笑われて。

その顔にノックアウトされたアタシは、30分経つても 人前に出
られる顔に戻れなかったのは ここだけの話。

運命って そんなモンなのかもしれない

長年使っているお気に入りってさ
買った時を思い出すと、ここぞの 一期一会だったりしない？

実は、10年使ってるウールのストールは 旅先でセール中だった
古着屋で見つけた。

6年乗ってるロードバイクは 親の田舎の自転車屋で 展示品を卸
した『新品中古』の破格で買った

私が探して出会ったというより、向こうが 偶然を装って私を呼び
寄せたような出会い。

しかも、買った時より 使い続けるうちに良さが分かってくる。

何かさ、運命ばかりが 偶然って面白いよね。

まさか、「彼氏」もそうだとは 思わなかった。

．．．そうだったのよ、今から思えば

デートの最後、どちらとも言い出すいつものお約束がある。

シメのコーヒーを飲みながら お互いの手帳を眺めるの。

「来週、どんな感じ？」 「平日なら、水曜、頑張れば金曜日もかな。

土日なら 土曜。」

来週の予定を見ながら いつの夜なら会えるか、どっちの土日なら
一日一緒に過ごせるか。

と で 教えあう

「だったら、金曜日頑張って、そのまま泊まりに来い」

「お泊りグッズもって 出勤かあ」
ちよつとゴネると、「水曜日に置きにすればいいだろ。」不機嫌丸出しに返される
じゃあ、金曜日終わったら 迎えに行くから そのまま俺の家だな
毎回 こんな感じ。
というより、今日も？ 勝手に予定が決まっちゃった。うーん、
相変わらず俺様だね、アンタって男は。
顔をみゃれば、フフと笑いながら ケータイへ予定を打ち込んでい
る。

そう、この男の予定は 全てスマートフォンへ打ち込んでいるらしい。

あ、個人ケータイのほうね。

ウチの会社、ケチだから 社用ケータイは 通話とメール機能しかないの。

ネットも使えなくもないけど、天気予報と乗換案内以外は アクセ
ス制限かかっている。

前から気になっていたのよね

「ねえ、スマホって使いやすいの？」

現場職に スマートフォンは使いづらこい。

パート達が「音が悪いのよね、案外」とか「汗で濡れた手でタッチ
パネルを触ると 感知してくれないの」

いろいろ聞くから、結局 買わずに来ている

「ああ、便利だ。触ってみるか？」

いきなりケータイを渡された。

ウヌヌ！ちよつとびっくり。

だって…ねえ？

よりによって 個人ケータイだよ？

個人情報とかプライベートとかのカタマリを いきなり渡されて
ちよつと緊張

信用されてるのは嬉しいけど…

かたまったままの私の手が、白くて大きな手が覆う

気がついたら リユウイチは 後ろ手に回っていて すっぱり抱き
かかえられてるような体勢

ちよ、ちよつと 近いでっせ兄さん。いくら ちよつと人が誰もい
ないカウンター席だからって…。いやいや 大胆すぎやしませんか？
ちよつとの緊張が ガチンと硬直したアタシを カタカタと笑う

「まさか、スマートフォンは 指先で操作するのを知らないとでも
？」

ククク、と笑う声に「そこじゃないでしょう！？」 言い返すも「い
いから、画面みるよ」「ここぞと美声が 耳に付く

「これが ロック解除」

ピツタリ重ねられた手、わずかに熱い。私の手？それとも リユウ
イチの手？

「で、メイン画面。ここに、『アプリ』って呼ばれてるソフトが色
々入っている」

私を抱き寄せるもう一つの手が 脇腹に届く。うっ 脇腹弱いんだ
よね、やめ やめて

「これが、手帳のアプリケーション。押して」
脇腹の手が 人の気も知らないで疼いている。まるで、濃厚なあの
時間を思い出させる触り方

耳がジンジンする。首筋がチリチリする。触れてもらえるのを待ち
焦がれてしまうあの時間へ体が変わりそうになっっていく

「どっつ？」

息で笑っているのが 耳をくすぐるから… ますます、タッチパネ

ルに触れている指が熱帯びて… 汗でスベった
ああもう、イジワル。イジワルすぎるわ。

「日付をクリックすると、その日の予定が下に表示される。」

ここを押すと 設定画面に飛べて、そのままここを押し続けて…」
説明が 右から左へ抜けていく。だって、人が少ない飲み屋のカウンターだからって この体制はマズイでしょ、恥ずかしいってば。完全に からかわれてる気がする。なのに、感覚が冴えきってしまった皮膚は、次の仕事を待ち望んでしまっている。どうにもならない、どうにかしてー

「ここで、俺の予定が 週間で分かる」

私の手を包んでいた手、絡めてきた指が、指の脇を同じく掠めてい
いやあ、もう ケータイどこじゃなあい！！ このエロ男め！

アタシを救ったのは、空気を読めない店員の

「お冷や、いかがですか？」 空いてる灰皿、お取替え致しますね
」

「このあと デザートお持ちしましょうか？」
漂う空気を分断してくれるような 能天気な声。

ほっ、惜しい気もしたけど ちょっと我が身救われたわ。…ん？
なんか今 変な本音が漏れた？き、気にしないで！

実は ベタ甘に撫でられたりするのが好きとか、オットゴニョゴニ
ョ。ん、んなことないわよっ！

それでもね、ケータイは そのまま触らせてくれたの。

「好きに遊んでみていい」いいの？って聞いたら。

「元々、お前に見られて困るモノは 無い」だって！！

例の店員いなくなったし、また ベツタリ甘やかせてくれたんだけ

ど 今はもつとすごいわよ。

向かい合うようなカッコ、しかも すっぱり腕の中で サラリ。お、おおう。ケータイ落としそうになったじゃない、危ない。危ない顔はきつと真つ赤。きつとじゃない。間違いなく。

今、見ているのは 見開き1週間の画面。

そりゃもう、朝からぎっしりつまった予定

自分の部署の朝礼から始まって、本社朝礼、同時に 自分が担当している重役だろう予定が表示されて。

「これは、グーグルでも見れる。…ケータイからもパソコンからも
「
すごい。」

自分の予定と、自分と関係している人の予定を同時に表示させて。詳細を押すと、関係する情報がメモ書きされてる

たまに、プライベートっぽい予定がチラホラ書いてあったりする
クリーニング引き取りとか、マンションの火災報知器点検とか、車
検まであと2年とか。

たまに、M:10:00コール有 M:20:00頃センター集合
とか、書いてある…Mって 真知子「私」の事？

多分そう。なんか嬉しくなる。自分との予定が ちゃんと手帳に載
ってるなんて。

勝手にニヤニヤしている私を放置して、リュウイチは 呼び出しブ
ザーを押している

「気分的に 飲み足りないな。この店、越乃寒梅あるのか…お前も
飲むか？」

のめり込んでる私は生返事「適当にもらう」「分かった。楽しいみ
たいだから そのまま遊んでろ」

取り上げるわけでもなく、ただ見守られている私。なんか、いろいろ気を許してもらっているのがチョットくすぐったくも嬉しい。

お言葉に甘えて、今度は 象の横顔？のアイコンをおもむろに押ししてみた。

「ねえ、これなんのソフト？」

振り向いた視線の先では、マス酒を受け取るリュウイチ。おもむろに、グラスを拭う仕草が見えた。手のこなしが妙に 柔らかくて…その色っぽい感じがした

「それは、俺のメモ帳。」

仕事中のメモを、取り敢えず 全部そこに放り込んで。データは、会社のパソコンからも 自宅からも ケータイからも呼び出せる。

分類と整理も出来るから、愛用してる。」

色んなアイコンが並んで よくわかんないけど、押して出てくるのは 仕事に関するコトばかり。

経済用語っぽいモノから、セレブが好きそうな歴史的な美術品、プレゼントで使えそうな地方の工芸品。

他には、各部署に出している報告書の事案とか、その途中経過とか。もちろん、自分でも勉強しているらしく、『物流・センター』のフォルダには、『物流用語』のデータもあった

こんな こむずかしいソフトを 使いこなしているのがすごい。

ここまで キッチリ仕事に没頭しきっているのも すごい。

無意識に言葉が口から漏れた

「よく恋愛する暇あるね」

言ったそばから、「あっ」自分の立場を思い出す。

「お互い様だろ？」

フッフ、と軽く笑われて 少しばかり安心。
つて、さあ。アンタ：抱えてる仕事の種類と数が違うでしょう．．．
アタシ、物流の単語は詳しいけど、経理用語と経済用語は 全然わ
かんないわ。

本当に よく 恋愛する気になるわね、この人

どという理性と集中力を持っているのかしら？もはや、鉄人だわね。

「別に、やれば出来る程のことだろう？」

あのね？ それ、嫌味？：よそ様より頭がお宜しいのを そろそろ
ご自覚くださいませ。

ふつーは ここまで ハイテクを使いこなせないものですわよ？

ここまでちゃんと保管管理してるなんて、情報の番人ね。アンタつ
て男は

でもねー おもったんだあ

「意外に 真面目だったのね」

こんだけ、仕事関連のデータばかりに出会うのに、さ
インターネットのブックマークをみたら、仕事以外っぽいサイトな
んで 全然ない。

せいぜい、履歴を拾っていたら なんかのエロ動画サイトにブチあ
たつたくらいくらいかしら？

あ、プライベート見すぎ？ 悪いわね、見ていいなら この際 見
ちゃおうと思ったのよ。

口に出してなかっただけ いいでしょ？黙ってあげてただけ、大人
でしょ？

ちなみに

着信履歴は、ほとんどが私。たまに、男友達なのか、みるからに
女じゃない名前が続いて、たまに 「お？」誰だと思ってみたら

苗字がしっかり柏木だった。…家族？

改めて言うのも難けど。

この人、本当に アタシに一途なのかも。でもって、本当に 仕事とアタシとしか ないのかも。

ついでに言っちゃったら

頭の良さに任せて、何か 人に顔向けできないことやってそうとか 思ったけど…

叩いてもホコリは出てこない人なのかも。

ひよんなことから付き合い始めたのに。

実際んとこ、こいつ 本当にいい奴かも。

ふと、乗って6年目のロードバイクが浮かぶ。

親の田舎へ遊びに行った時 暇そうにしていた近所の自転車屋の壁に飾られてたのが 気に入って 思わず即買いた。

お世辞にも 簡単に買える金額じゃなかったし、店の頑固なおっちゃん「体格が合わないよ 怪我するよ」って 最初は止めていたでも、実際に乗ってみた途端

「姉ちゃん、意外に足が長いんだね。最初、無理だと思ったけどこれなら乗れるよ。」

って喜んでくれて、ハンドルと本体をつなぐ部品を交換してサドルを一番下まで下げるのを条件で 売ってくれた。

買ったあと、おっちゃんが「衝動買い出来る物じゃないんだよ、こういう自転車は」言った意味が分かった

今なら 常識としてしってる知識だけど、ロードバイクは基本 乗り手の体格に合わせてオーダーメイドだということ。

フレームだって 10万はする代物。簡単に交換できない

フレームのサイズが合わなければ おっちゃんの言うとおり「体が故障・怪我する」

そもそも 販売携帯自体が ほぼ 受注生産で、納車まで 1ヶ月〜3ヶ月。長いと半年もザラということ

だからあれば、その場の感情に任せて買っちゃったけど
じっくり乗れるカスタマイズをされて、あたしを待っていてくれた
という運命の出会いだった。

私しか分からない「運命」の出会いだけど、直感がそう言ってる

あの時の感覚と似てる。

この男との出会いも 突然すぎるし、アタシにしては珍しく 流されるように付き合い始めた。

言いたいこと言い合って、たまに折れて。折れてくれなかったら、
こっちも 納得いくまで折れなくて

諦めたこともあるけど、諦めてもらったこともある

でも、そんなやり取りが アナタとは楽しく嬉しくて。

運命との出会いって そんなもんなのかもしれない。

この男とも… もしかしたら 運命とかいう そんなモンなのかもしれない

手元の日本酒を飲み干したころだった。

「ケータイで思い出した。

お前、自分の社用ケータイ使いすぎだ。そろそろ、通話料が高すぎるって警告の連絡くるぞ」

えーっ！ かかってくる自分のパートたちの「聞いてえ〜」の愚痴

電話に付き合ってたら やっぱり 怒られる金額まで行ったか…
「リュウイチは？」

「俺は、毎回 無料通話で抑えてる。掛けるところが大体決まってる分、な」

その2週間後 リュウイチの予想は大当りした

総務課からメールが来て どんより長い警告がきましたと…さ！

さすが運命の殿方は 予告も当てるのね。

トホホ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6283s/>

続・ただいま 検品中

2011年9月5日21時55分発行